

「敗北は終わりではない!」一層の奮闘を

第6代委員長 森 朗 (全道庁労連)



もり・あきら

1935年旧苗穂町生まれ。1960年4月札幌医科大学解剖学教室。1992年2月～95年9月に委員長を務めた。趣味はカラオケ。

仲間、組合、患者
を信じた闘争

自治労道本部の任務は
1992年から副

委員長、委員長と4年間であったが、私にとって道本部の指導でたまたま1969年、全道庁医大支部での「看護婦夜勤制限闘争」が意義深い。「仲間を信じ、組合を信じ、そして患者を信じて」の信条が、その後26年間の集大成となっている。

道本部での4年間は、自民党政治がつくり出した巨額な「赤字財政の建て

直し」の美名のもとに、「臨調行政改革」による生活者直撃の負担増が強いられた。さらに、公務員労働者には人事院勧告無視の賃金引き下げや、現業の民間委託攻撃が強まった時期だった。当然、政治闘争、とりわけ各種選挙闘争が重要なたたかいとなったのである。

忘れられない

峰崎さんの参院選

この選挙闘争の中で忘れられないたた

かいは、対馬孝且参議の後継者として初挑戦した、峰崎直樹さんの参議選だ。峰崎さんの資質は関係者の誰しものが認めるところであったが、全道での知名度は低く厳しいたたかいだった。しかしこの厳しい状況を乗り越え、みごと





第33回定期大会の冒頭にあいさつする森委員長=1993年9月24日、共済ホール（当時は共済ホールでの大会が慣例だった）

社会党2議席を死守できたのは、全道労協・農民連盟・社会党の結束した果敢な行動であった。同時に万全な体調でない中、何としても勝利せねばと奮闘された対馬さんの姿勢が、選対全体を奮い立たせたことも大きかった。

た。

今、自治労は結成以来最大の厳しい状況にあらう。しかし、「敗北は終わりではない！あきらめは終わり」が先人の言葉だ。前進を信じてなお一層の奮闘を期待したい。（機関紙「自治労北海道」2013年1月11、21日号再掲）



俳優の菅原文太さん夫妻が来局した際、道本部、全道庁の役職員とともに。菅原さんは、1981年に金沢市で開かれた全国自治研集会で講演をしてから自治労とのつながりがあった=1994年7月、道本部委員長室

あらためて労働者文化の再興を

第8代委員長 三輪 修彪（旭川市職労）



みわ・しゅうひょう

1943年旭川市生まれ。1963年旭川市役所管財課。1999年10月～2001年9月に委員長を務めた。趣味は読書、薪割。

地公の身分・生活
向上に力尽くした
自治労

千年紀という
言葉がある。
1000年という

大きな時代区画を表す。西暦2度目の千年紀、私は奇しくも道本部の責任を担っていた。結成60年という機会に、あらためて前後の歴史を俯瞰し、自治労の運動とも重ねて往時を偲びたいと思う。

人類が永くその生産手段としていた手工業から機械工業化のいわゆる産業革命が18世紀中葉のイギリスで興り、

たちまち欧州諸国に伝播し、一挙に文明化がすすむ。日本は、長い鎖国を経て明治維新で西欧文化に触れ、文明開化の号令のもとで百年以上の遅れを取り戻すべく富国強兵に走る。そして日清、日露戦争、満州傀儡政権、日韓併合と暴走をつづけ、世界大戦につながることは誰もが知るところだ。ファシズムの一翼を担い、揚げ句の果てに原爆を投下されてようやく悪夢の桎梏（しっこく）から解放された。民主憲法を得た日本は、東西冷戦下の国際情勢の中でいち早く復興を遂げ、経済大国として今日平和を享受している。自治労も戦後民主主義の中で産声をあげ、地方公務員労働者の身分と生活の向上



第35回全道野球大会始球式でボールを投げる直前の三輪委員長＝2001年8月2日、蘭越町

に力を注ぐとともに、地方自治体の民主化、住民福祉の充実に力を尽くしてきた。

保守勢力に対抗し
労働戦線統一した
が…

20世紀後
半の50余年
はいまわし

い軍国主義の軛(くびき)を離れ、米国の傘の下とはいえ先進国の一員として振舞ってきた。

総評労働運動の一員として組織の強化発展をつづけてきた自治労も、

日本経済に陰りが見えはじめた頃から、内外に大きな課題をかかえるようになった。長期政権のおごりの中で改憲論が跋扈(ばっこ)し、軍備増強がつづく。この保守勢力に対抗して政権を展望することをめざして追求した労働戦線の統一は、1989年に連合結成はなったが、残念ながら当初の目的を達する力を持つに至っていない。

厳しい中で自治労
の旗のもと団結

米ソ冷戦構造がつづき、東南アジアや中東では戦火が絶えず、後進国の開発も進む中で、主要国の動向も変わってきた。社会主義国ソビエトにひずみが

生じ、ソ連邦が消滅して冷戦構造が崩壊した。2000年を期してロシアの実権を握ったプーチンは、ウクライナ侵略でその独裁者の本質をあらわにしている。

エネルギー資源の転換、公社の民営化、臨調行革、さらに地方財政の窮状に乗じた平成の大合併とつづく中で、自治労を包む環境は大きく変化している。私には千年紀を境に、失われつつある労働者文化の再興が急がれると思えてならない。厳しい環境の中で、自治労の旗のもと、あらためて団結を強めていただくことを切に願っている。(2022年5月)



第42回定期大会の冒頭あいさつをする三輪委員長、この大会で退任した=2001年9月27日、ホテルポールスター札幌

現退一致で生涯組合員・生涯現役

第9代委員長 富山 隆（全道庁労連）



とみやま・たかし

1944年函館市生まれ。1960年北海道庁出納局。2001年10月～03年9月に委員長を務めた。趣味は映画鑑賞、ゴルフ。

23年間、まさに 激動の時代

1980年、全道庁本部に専従以来、全道庁と自治労道本部の役員として、23年間任務に就いた。特に1983年の横路道政の実現、横路道政下の労働運動、労働戦線の統一、連合結成。自民党に代わる新しい政治勢力の結集。社会民主党から民主党の結成。まさに激動の時代だった。役割を先輩から受け継いで、本部、全国の仲間と連携し、運動をすすめてきた。

2001年9月の大会で、道本部委員長に就任した翌日、新聞で自治労本部の不祥事事件が報道され、道本部に内外からの問い合わせが集中した。自治労本部も1カ月前に新体制になったばかりで、自治労組織は大混乱になったのだ。かなり以前の問題が突然マスコミをとおして報道され、自治労への意図的な介入が感じられる内容だった。

組織の危機乗り越え 再生

まずは事実関係の把握、徹底した真相の究明を決意し、自治労本部内に真相究明委員会が設置され、地方代表として私も参加し全力を挙げた。その後もマスコミ報道がつづいた。特に、憶測で組合幹部が独断で組合費を流用したとの報道は事実誤認で、本人が直ちに否定した。しかし、このように報道が一方的で、真相究明の遅れ、マスコミの後追い対応となったことで、全国の地方組織や組合員からの不満が高まり、当時はまさに自治労の危機だった。

それから4カ月、自治労本部、地方組織は情勢認識を統一し、自治労組織の存続と再生の決意を固めた。そのうえで真相究明報告、対応方針、自治労再生方針を決定し、2002年8月の自治労大会で新役員体制を確立し、自治労再生をスタートさせた。

自治労は組織の危機を乗り越え今日、たくましく再生している。当時の自治労本部、地方組織が危機感をもち、一体となって団結したことで、危機を乗り越えた歴史を忘れることはできない。

自治労退職者会の 役割重要

2011年から、北海道退職者連合の事務局長に就任して以来10年間、連合北海道と「現退一致」の方針を掲げ多くの活動を展開してきた。2021年11月に会長を退任し労働運動の最後の任務を終えた。多くのみなさんに心から感謝したい。

自治労退職者会の役割は重要だと感じている。特に、各市町村の自治労退職者会は中心的な役割を担っており期待が大きい。多くの退職者、OBの皆さんが各地区で役員を担い、元気に活躍されていることを誇りに思う。

連合は、組合員から退職者組合員と連続することを「生涯組合員」と言う。これからも、「生涯組合員」「生涯現役」。地域でしっかり連携していきたい。(2022年5月)



第43回定期大会で答弁する富山委員長
=2002年9月27日、ホテルポールスター
札幌



第73回全道メーデー大会のパレードで第2グループの先頭を歩く
富山委員長(前列中央)=2002年5月1日、札幌市大通り7丁目

政権交代の「夢」後輩に託したい

第10代委員長 大場 博之（札幌市職連）



おおば・ひろゆき

1947年夕張市生まれ。1965年札幌市役所都市計画課。2003年10月～06年9月に委員長を務めた。趣味はゴルフ。

小泉構造改革
公務員バッシング
吹き荒れ

自治労北海道本部との
かかわりは、

1983年札幌市職専従で道本部社会福祉評議会議長の任務に就いた時からだ。その4年後、初めて道本部執行委員として衛生医療・社会福祉評議会事務局長を2年務めた。単組に戻ったが、9年後再び道本部専従となり、副委員長6年、委員長3年の自治労運動は、楽しくもあり辛いたたかひもあった。

2003年、委員長に就任した第44回定期大会の2日目は、早朝の釧路沖地震で大会を半日繰り上げることになり、

先を暗示するスタートだった。



副委員長時代に大会で答弁する大場さん。左横は、のちに参議院議員となった相原久美子副委員長＝2003年9月25日

小泉構造改革による地方交付税・社会保障費カット、強制的な市町村合併、公務員バッシングが吹き荒れ、給与削減、寒冷地手当削減、地域給導入などなど…厳しい攻撃が続いた。しかし、長期自民党政権に対する国民の離反は着実に進み、近い将来必ず政権交代の機運が訪れる。と政治闘争にも邁進した時代でもあった。

朝日参議後継は
「あいはらくみこ」

2007年は
参議院選挙
を政治闘争

の最重要年と位置づけ、2005年から自治労組織内・朝日俊弘参議の後継が大きな課題だった。私は当時、自治労政治活動推進会議議長で選考作業のまっただ中にいた。複数の県本部に打診するも状況は困難で、本部と関係地連代表者の会議で、「最

後は北海道」となった。最初は数人の名前を挙げ、最後に、「あいはらくみこ」の名前を出すと、本部三役の全員が大きくうなずいたのが今でも忘れられない。

相原さんは、札幌市の非常勤職員で、札幌市職の専従として待遇改善を求める活動を経て、道本部で女性初の副委員長、さらに自治労本部で組織局長として活躍していた。参院選では多くの県本部の支持を受け、50万票を超える得票数で民主党1位当選を果たし、自治労の代表として2期12年、国会で活躍、岸まき子さんにバトンタッチした。要請を受け入れてくれた相原さんには、今でも心からの感謝と敬意を払いたい。

どんな理由でも
戦争は絶対だめ

その後、勢いを得た民主党は2009年の衆議院選挙で政権交代を果たしたものの、極めて残念ながら国民の信任を繋ぎとめることができず、わずか3年余りで政権を手放すこととなった。あれから10年、自民党は政権に振り返り、国民の生活や格差の拡大を顧みず、平和と安心を脅かす安保法の強行制定や憲法改悪に突き進んでいる。

2022年2月、ロシアがウクライナに侵略し多くの国民を虐殺している。どんな理由があっても戦争だけは絶対してはならない。一度は果たした政権交代だ。困難を克服し「国民のための真の政治」を生きているうちに見られるよう、後輩に夢を託したい。(2022年4月)



第44回定期大会で委員長に就任し団結ガンパローをする大場委員長=2003年9月26日、ホテルポールスター札幌

「労働組合の存在感」にこだわりを持って

第11代委員長 高柳

薫（遠軽町労連）



たかやなぎ・かおる

1950年遠軽町生まれ。1968年遠軽町役場税務課。2006年10月～07年9月に委員長を務めた。生まれ年のコイン収集がマイブーム。

影響を受けた言葉
「社会的地位向上」

1997年2月から2007年まで、自治労北海道本部の専従役員として、執行委員1年、財政局長6年、書記長3年、執行委員長1年の10年8カ月間任務に就き、その後、連合北海道会長4年、北海道労働金庫理事長5年と重責を担わせていただいた。この間、全道の多くの諸先輩や仲間の皆さんのご支援やご協力に、あらためて感謝とお礼を申し上げます。

連合北海道会長時代は、①社会的影響力ある労働運動の展開②地方連合に課せられた地域政策の推進や、地域課題の取り組みを念頭に進めてきた。私自身は「労働組合の存在感」にこだわりを持ちつづけてきたが、先輩（故人）の言葉、「労働組合の社会的地位の向上」の影響が大きかったと思う。たたかいの延長線上では、2009年の総選挙で政権交代・民主党政権誕生の一翼も担わせていただいた。

連合北海道の中核は、全道ネットワーク、政策形成能力、地域での影響力、組織力等、やはり自治労が担うべきものと確信している。また、自治体労働者は、政治が決めたことを地域の第一線で業務として行うが、その政策が住民に資するものか否かの判断をできる立場にもあり、労働組合として、政治・政策への発信力も役割として期待が大きいと思う。

記憶に残る、あい
はらの「74130」

さて、自治
労時代から、
今も記憶に残

っている数字は「74130」だ。

これは、2007年参議院選挙で自治
労北海道組織内「あいはらくみこ」候
補の比例代表選挙における北海道の得
票数で、全国では50万7787票を獲得
した。一説には、ア行効果（投票所の
氏名掲示の最初）と言われるが、その
後の選挙や他政党候補を見る限り、こ
れは都市伝説ではないかと思われる。

この選挙は、当時、非正規職員の処遇改善などが、主要な課題として取り
上げられており、「あいはらくみこ」さんは、非正規職員の代表として、大
きな期待が寄せられたのだ。

自治労つぶしの
象徴「夕張市財政
破綻」

一方、夕張市の財政破綻・「財政再建団体」に至
る経過は、当時の小泉・安倍政権の市場原理主義・
構造改革による格差社会・地方切り捨て、自治労つ

ぶしの象徴として意図的・政治的に利用されたといっても過言ではないと思
う。

また、96年拓銀の経営破綻で金
融再生や2006年夕張破綻で自治体
再生と、北海道が時の政権の思惑
で見せしめにされてきた感を強く
抱き、自治労組織が危機感を持っ
てたたかったことも大きかった。

2022年の夏も自治労の軽重を問
われるたたかいが！（2022年5月）



当選後はじめて来局した相原参議と=2007
年8月17日、道本部書記局



第47回定期大会で就任し、あいさつする高柳委員
長=2006年9月28日、ホテルポールスター札幌

捲土重来、一層の奮闘を

第12代委員長 三浦 正道（札幌市職連）



みうら・まさみち

1949年小平町生まれ。1969年札幌市役所東福祉事務所。2007年10月～09年9月に委員長を務めた。趣味は野菜づくり。

選挙闘争に邁進

2006年9月
から副委員長、
2007年から2

年間委員長を務めた。いずれも突然の指名で統一自治体選挙、参議院選挙、解散総選挙がつづく大変重要な時期だった。自治労北海道の立場からすれば、常にそのたたかひの先頭に立たなくてはならないため、各選挙闘争に邁進した記憶が圧倒的だ。

副委員長就任後、賃金と政治・政策担当で、翌年4月の統一自治体選挙は、

知事選を頂点に、札幌市職連出身の私は、上田文雄札幌市長2期目当選にむけて全力で取り組んだ。1期目の札幌市長選は8人乱立選挙を比較1位で突破し、再選挙で当選を勝ち取っていた。市役所内部以外から初の市長を実現し、札幌市職連や札幌市労連もまさに悲願の上田市長の実現だった。それだけに2期目選挙で天下り官僚に明け渡す訳にはいかない。と、本当に必死にたたかった。結果当選を勝ち取り、札幌市議22人も改選議席を上回る当選で大幅に躍進した。この成果は上田効果が大きく影響したと、みんなで手を取り合って喜んだのが、つい先日のことのような。

自治労組織内に
「あいはら」擁立
トップ当選

引き続き7月には「あいはらくみこ」の参院選だ。実は、「あいはら」擁立は2005年当時の道本部大場委員長が、自治労組織内・朝日俊弘参議の後継擁立

を、自治労政治活動推進会議議長の立場もあり、札幌市職連委員長と2人で



連合北海道第20回定期大会で発言する三浦委員長＝2007年10月30日、厚生年金会館

説得し、相原さんに立候補を決意させた経緯がある。

その前年に私は、札幌市職連委員長を退任した後の健康診断で、前立腺ガンがわかり、術後の治療で入院中だった。病室で、「あいはら」擁立の電話を受け、「えっ」と絶句したが、その後冷静に、相原さんなら適任ではないだろうか。非常勤職員の処遇改善前進のきっかけになると判断した。難

題山積だったが、入院中の気楽さもあり安易に受け止めていた感があった。しかし道本部政治担当副委員長という立場になり、これは大変だと思った。しかも「あいはら」擁立の張本人はすでに労働福祉団体へ戦線移行済みだ。「あとは後輩に希望を託す」と言い残して…。

そんなめぐり合わせで「あいはらくみこ」の当選に、これまた総力を挙げ比例トップ当選、衆参ねじれ実現、解散総選挙で、ついに政権交代を実現したのだ。

夕張財政再建にむ け道・総務省交渉

もちろん選挙だけでなく、さまざまなたたかいを展開した。特に夕張の財政破綻は、1日も早い財政再建にむけて、道や総務省交渉に総力を挙げ取り組

んだが、権力を前になかなか厳しい思いもした。

自治労はいま、大変厳しい状況にあると思うが、あきらめたら負け、捲土重来を期してみんなで一層の奮闘を！
(2022年6月)



第48回定期大会で団結ガンパローをする三浦委員長＝2007年9月28日、ホテルポールスター札幌

野党勢力の結集で再び政権交代へ

第13代委員長 山上 潔（全道庁労連）



やまがみ・きよし

1955年豊富町生まれ。1973年北海道庁宗谷支庁税務課。2009年10月～15年9月に委員長を務めた。趣味は読書と映画鑑賞。

記憶に残る
2009政権交代

2007年9月の道本部大会で選任されて

以来、書記長を1期2年、委員長を3期6年務めた。

単組での専従期間が長かったこともあり、書記長就任時はすでに52歳になっていた。組合運動は体力勝負というところがあるが、口はまだまだ達者なものの、身体の方はすでにあちこちガタがきて、だましまししながら8年もの長い間、道本部にお世話になっ

た。当時の役職員の皆さんに、本当に感謝している。

さて、「あの頃を振り返って」とのお題をいただいたが、当時の公務員制度改革・給与制度の見直し、東日本大震災支援や原発事故、秘密保護法や戦争法阻止闘争など、あれやこれやと思いつかべ一向に考えがまとまらなかった。一番記憶に残っていることに絞るのが良いと思い、2009年8月の政権交代のことを振り返ることにした。当時、私は道本部書記長で、翌9月の大会で委員長に立候補することになっていた。

300議席から大敗
政権失った2012年

7月21日解散、8月30日投開票という真夏の選挙戦となったが、自民党が惨敗、民主党が圧勝して歴史的な政権交代となった。優勢は確信していたもの

の、よもや300議席を超えて圧勝するとまでは予想できなかった。

投開票日の翌日、勝利に沸く書記局に顧問のM先輩が顔を出し、「まさか

自分が生きている間に、政権交代が実現するとはなあ」と感慨深げにしみじみと話をして帰った。その先輩は、横路革新道政実現に尽力した人でもあった。

その後、良いことばかりはつづかず、鳩山さん、菅さん、野田さんと1年ごとに首相が交代し、民主党は迷走しつづけた。



民主党北海道に「人勸」の取り扱いについて佐野法充幹事長に申し入れする山上委員長=2010年10月1日、民主党北海道

委員長に就任して3年後の2012年11月16日、野田佳彦首相が衆議院を解散し、総選挙（12月16日投開票）に打って出たが、大敗しあっけなく政権を失った。

多くの国民は、身内の争いとうつつを抜かした民主党に当然の報いを与えたのだろう。良い政策や政治も行っていたが、実にもったいない結果となってしまったと思う。

「自公政権」
つづいてはダメだ

あれから10年が過ぎた。民主党はすでになく、所属議員の大半が民進党を経て立憲民主党や国民民主党に分かれていった。残念である。

今改めて思うことは、このまま自公政権がつづいてはダメだということだ。



第53回定期大会冒頭にあいさつをする山上委員長=2012年9月27日、ホテルポールスター札幌

年金・介護などの将来不安、再軍備・戦争への危惧、村度・公文書改ざんなど政治腐敗・劣化の深まり、貧困、国民生活の悪化、まさに今こそ野党勢力が結束・協力して、再び政権交代を実現し、政治を変えなければならない時である。

野党の奮闘を期待したい。連合や自治労もしっかり後押ししてほしい。
(2022年5月)

世話役活動こそが労働組合の団結

第14代委員長 大出 彰良（名寄市労連）



おおいで・あきよし

1961年風連町生まれ。1981年風連町役場水道課。2015年10月～19年9月に委員長を務めた。趣味は農作業（見習い中）。

「あいはら」さん
引き継ぐ「岸参議」
誕生

2015年9月の大会で執行委員長に選任

され、2期4年間、歴史ある自治労北海道本部の舵取り役となった。支えていただいた全道の組合員、諸先輩に心から感謝している。

任期中、相原久美子参議が取り組んだ、非正規職員の労働条件改善の第一歩を担保する「地方自治法」改正。「あいはら」さんを引き継ぐ、岩見沢市職出身の「岸まきこ」参議院議員誕生な

ど、組合員・家族・OBが総力を結集した結果だ。一方で、「戦争法」と言われる安保法施行、「共謀罪（改正組織的犯罪処罰法）」の強行採決やモリ・カケ疑惑、幌延深地層研究の期間延長など、平和と民主主義が著しく後退した時期でもあった。

人員削減で労組
地方自治が危機的

さらに、災害が少ない北海道で2016年の台風10号、2018年の胆振東部地震を経験し、大災害などの緊急時対応が、臨調行革、平成の大合併、集中改革プラン

による地方自治体の人員削減により、住民の命と財産を守るギリギリの状況になっていることが明らかになった。そうした情勢や、永年にわたる自治体での採用抑制政策で、業務量と人員、世代間のアンバランスをまねいた。

本来、地域住民のための行政サービス向上と、それを担う職員の労働条件の改善が大きな目標である労働組合が、量と質の両面から次代への継承が難

しくなった。それは労働組合の担い手不足にとどまらず、メンタル疾患や若年離職という労働組合、地方自治にとって危機的な問題が顕著に現れてきた時期でもあった。

だからこそ、職場で組合員の悩みや想いに寄り添い、その解決にむけた方策を労働組合が窓口になる。そのあたり前の労働運動を、原点に立ち返ってつくりあげる必要があった。

自主福祉活動を
「組織づくり」の
ツールに

自治労運動の領域は
大きく広がり、期待が
高まる一方で、組合員個々には馴染めない領域がある

のも事実だ。そんな中でも、組合員の生活の支えとしての自主福祉活動は、重要な分野だ。誰でも、もしもの時の「そなえ」として貯蓄や共済（保険）



第60回定期大会の冒頭にあいさつをする大出委員長＝
2018年9月27日、ホテルポールスター札幌

さまざまで、未だ道半ばだ。

労働運動は結果より、そこに至る経過こそが運動だと確信している。それは組合員への世話役活動であり、相互の議論と行動。それらは大変で時間がかかるかもしれない。しかし、その先には組合員家族の喜びと感謝、労働組合の団結があるはずだ。（2022年5月）



自治労第92回定期大会の役員選考委員長として立合演説会で司会をする大出委員長＝2019年8月28日、福岡市・福岡国際センター

の加入を考える。組合員であることで、メリットがあるとわかれば、話は聞いてもらえるはずだ。だからこそ、自主福祉活動を組織づくりのツールとして活用すべきとの想いで、機会あるごとに重要性を訴えてきたが、単組役員の受け止めは

歴史に残るコロナ禍とウクライナ侵攻

第15代委員長 千葉 利裕 (全道庁労連)



ちば・としひろ

1962年中標津町生まれ。1984年北海道庁上川支庁名寄税務事務所。2019年10月～道本部委員長。趣味は自転車(ロードバイク)。

労働運動の基本、いかに進めるか課題

現職としては、振り返るにはまだ早い

が、在任中に起きた2つの事件は確実に歴史に残るだろう。2020年から全世界に拡大した新型コロナウイルスによるパンデミックと、2022年2月にはじまったロシアによるウクライナ侵攻だ。

コロナ禍では、集まり、話し合い、一緒に行動する、というまさに労働運動の基本を禁じられる中で、いかにして運動を進めるのかという課題に直面した。

技術革新一気に進み組織再編も

ウェブを使った会議やオルグ、電子投票による採決や役員選挙、職場PCのリモート操作による在宅勤務など技術革新が一気に進ん

だ。一方で、組織活動総体の低下は否めず、新採加入率は5年間で10ポイント下落し、自治体単組の新冠町職、佐呂間町職労の自治労脱退も発生した。



Zoomと一部対面で開催した第63回定期大会、左上が道本部執行部で中央が千葉委員長=2020年9月26日、ホテルポルスター札幌



3年ぶりに200人が参加し対面で開いた第64回定期大会で、総括答弁する千葉委員長＝2022年9月29日、ホテルポールスター札幌

組合員数の減少が加速し、収入減少に対応した組織再編として、地方本部統合、道本部書記局定数の見直しを行いながら、組織の再強化を進めていくことを決定した。

2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻は、戦後の国際秩序に衝撃を与えた。常任理事国のロシアが、公然と国際法を踏みにじり、「使えない兵器」と言われた核を威嚇の道具に使いはじめた。岸田内閣は「敵基地攻撃論」を含む安保政策の転換、防衛費の倍増とその

ための増税、さらには原発への再依存を一方向的に決定した。

コロナ禍で注目された「社会を支えるエッセンシャルワーカー」の処遇改善は政治課題となり、政府も手をつけはじめた。コロナ禍で公共サービスの重要性が再評価されてきたが、在任中の衆参2回の選挙では、そのための政治転換までは成し遂げられなかった。自民党が政権復帰し10年、安倍・菅に続いた岸田政権は支持率が急低下したものの、対する野党も国民民主党や社会民主党の一部と合流した立憲民主党が後退し、自治労は組織内・鬼木まことの議席を確保したが、政治の混迷がつづいている。

安倍銃撃事件で 選挙運動一時停止

在任中、衆院5区の池田まき選対、参院選挙区の徳永エリ選対と第20回統一自治体選の道合選の任務を頂いた。池田は残念ながら及ばず、徳永は最後までつれた。投票日2日前の安倍晋三銃撃事件で選挙行動は一時停止し、最終日は、車に乗らない候補と炎天下で丸1日行動をともし、勝利を手にできた。

統一自治体選挙は、組織内の現職が相次ぎ落選するなど、一段と厳しい結果となった。連合加盟産別の支持政党が2つに分かれ、野党と言えない勢力が伸長し、現時点で政治の行き先は見通せない。後日、この時代の判断が誤りでなかったと評価されることを願うばかりである。(2023年4月)



創成期「自治労の旗のもとへ」一本化

岩崎 守男（1937年生まれ／釧路市職労）

1966年10月－70年9月青年婦人部長（69年度は共闘部長兼務）

道本部結成前の全市連で役員から道本部役員（青年部長）へ移行した。

道本部の創成期は、植物園前の事務所ですべて全道庁、全市連、町村連が同居していた。旧道職員会館で、別名オランダ屋敷と言われていた。

運動の主標は組織強化で、トロイカと言われる行政3評からの脱皮、自治労の旗のもとへ一本化だった。未組織市町村も多く組織化に力点を置いた。当時は未組織の自治体に行って名刺を出すす「全日自労」とまちがえられ、メジャーではなかった。

賃金闘争では、時間内くいこみ統一行動に入る前に「賃金論」で1泊2日の学習会を開催。賃金は労働の対価、労働力の対価ではないなど、口角泡を飛ばし、風呂に入っても議論がつづいた。懐かしい思い出だ。

政治闘争は、参院選全国区でたたかった山崎昇さんの勝利が、自治労北海道の自治労意識を高める一歩となった。また、市町村長・議の革新化闘争は、自治労が地域で存在感を高め、「役場の人から自治労の人」に変わった。地域の革新化に大きな役割を果たしたと言える。



自治労は永遠に不滅です

澤口 賢一（1950年生まれ／直属支部）

1969年12月－2011年12月書記

70年安保の前年、道本部に入職した。思い起こせば、当時は70年安保闘争、沖縄返還要求で連日集会が開かれ、札幌駅前通りを横いっぱい仲間が手を繋ぎあって広がり、自治労隊列の先頭で意気揚々と道本部旗を高く掲げたものだ。

また、沖縄が返還された数年後には那覇基地を「人間の鎖」で包囲する第1回の全国行動に、故北村英人委員長を団長として北海道から10人、私も事務局で参加した。合図とともに人々が手を結び完

全に包囲した時は感激した。これを機に道本部は沖縄県本部から「反戦活動」を、沖縄県本部は道本部から「政治活動」を学ぶ県本部交流が行われることとなった。

一方、当時FAXがなく、春闘情報などは私たちの声をテープレコーダに録音し、各単組・総支部に電話で発信した。また、各文書はガリ版時代で3～5ミリ方眼枠に力任せで書くとき破れるため「優しく丁寧に」と、先輩にアドバイスされたものだ。

1番の思い出は73年から4年間、組織教宣部で年6回の「活動家学校」事務局で、計24回、平均30人の各単組・総支部の将来を担う活動家とともに、自治会館（現：ホテルポールスター札幌）1F大広間で1週間寝食をともにした。その多くの仲間との出会いが、のちに組織内国会議員3人の選挙時や公設の秘書として、

各地域で候補者や議員本人、私までも激励を受け勇気と元気をいただいた。今後も身体が動ける限り自治労応援団事務局として、OBL会や退職者会仲間とともに、岸真紀子さんの再選をはじめ、自治労組織内の政治活動にお役に立てればと思っている。自治労は永遠に不滅です。



人生を賭した沖縄闘争

古川 隆之（1944年生まれ／深川市職労）

1971年10月－75年9月青年婦人部長兼共闘部長

道本部の中央執行委員（1981年度、職名の中央を廃止）として4年間その任についた。青年婦人部長として、共闘部長も兼務したが、青年婦人部が中心的な役割だった。

この時代は青年戦線が混迷し、特に青年部運動を社会党・総評ブロック（北海道では全道労協）の旗の下に結集する青年運動の構築をいかにつくり上げるかで、思想闘争、路線論争が日常的に展開され、口角泡飛ばしてオルグしたものだ。

また、沖縄の祖国復帰のたたかいが重要な政治闘争、社会問題となり全国的に運動が高揚した。勢い、労働運動とりわけ、青年部運動は沖縄復帰闘争が運動の中心となり、学習会やデモが全国的に展開され、北海道では札幌、東京では国会にむけて集中的に取り組んだ。中央行動は何回も列車に乗り、多くの青年部員が参加した。多い時は列車2両分が自治労

北海道部隊という時もあった。当時は東京は修学旅行以来とか、初めての人もいた。当然列車の中では学習やうたごえで、仲間としての連帯を確認した。行動は激しいデモの連続で、機動隊と対峙しながら訓練され、たたかいをとおして成長し、単組の運動で役員として、活動家として組合運動の礎をつくった仲間がたくさんいた。こういったたたかい（運動）を通じて、自治労が強化されていったのだ。

沖縄は2022年5月15日、復帰50年の節目を迎えたが、自分の人生を賭したたたかいのひとつが沖縄闘争だ。コロナ禍で久しく沖縄での現地行動が開催されない中で、平和行進が久しぶりに行われ、高退連青年部の気持ちでデモ行進をした。いわば、沖縄闘争は小生のたたかいの全国でデビューの出发点で、道本部役員時代の忘れることのできない運動だ。



道本部に初の女性専従実現

薮 育美（1950年生まれ／直属支部）

1974年11月－2008年3月書記

今では当然のように女性執行委員が道本部に専従しているが、私が就職した当時は執行委員は全員男性で、数人の女性書記という書記局風景だった。

ある年の青婦部「夏期交流集会」の帰路、富良野市職に立ち寄る青婦部役員に同行し、辰巳良子さんを、青婦部副部長として道本部専従に要請する場を目撃した。本人と単組役員、仲間たちへの説得の場だ。男社会の労働組合の中に女性を出すのは本人はもとより、単組も「清水の舞台から飛び降りる」ような覚悟が必要だったと思う。長時間にわたる議論の末、後日、単組も本人も了承して、道本部に初の女性の専従が実現した。1987年のことだ。あの時、苦渋の決断をした本人と単組の仲間たち、その姿を見た私も「何かの支えにならなければ」という気

持ちが芽生えた。

私自身も青婦部に関わるようになり、当時のスローガン「結婚しても出産しても働き続けよう」に影響を受け、自らもその道を歩きはじめた。

代々の婦人部長や、その後の女性部長という専従者を選出するのは困難を極めた。それでも、多くの犠牲をはらいながらも決断した女性たちで引き継いできた。その人たちとともに仕事のできたことは幸せなことだった。今では専門部や3役、組織内議員にも多数の女性が出て活躍する時代になった。当時の青婦部幹部の決断に恐れいると同時に、実現できたことに感謝だ。

これからは男女関係なく、働く者の味方として組合活動に関わりつづけ、活躍してくれることを切に願う。



学習と交流、私の財産

宮川 真希（1957年生まれ／直属支部）

1975年4月－2013年5月書記、以降全労済へ転籍

道本部には1975年に採用になり、2013年、自治労共済と全労済の統合時、全労済に転籍し、15年に退職した。

私は、道本部の書記局が植物園前にある時から働きはじめた。ある先輩に、「選挙事務所に派遣されて戻ったら、自分の席に知らない人（私）が座っていた」と

言われたことが、のちに笑話となった。会館は道庁に近く、1976年3月、通勤時に道庁前を通った直後、「道庁爆破事件」が起きて恐怖を感じた。その後、事務所は北4条西4丁目の加森ビルに移転した。

道本部で働いたことで、多くのことを学習した。活動家学校や独立前の青婦部

時代のキャンプにも参加し、職場で起きていることを分散会で聞き、職場経験のない私にはとても勉強になった。

自治労本部青婦部の山中湖のキャンプに参加した時も、全国の書記仲間や自治体職場の組合員の話など、多くの方と交流ができたことは、私の財産となっている。

選挙の時は、事務所のみならず、選挙

カーに乗ってマイクスタッフも経験した。大変だったが、今となっては貴重な体験をさせていただいたと思っている。

1980年に、組合員皆さんのカンパで自治労会館ができた時は感動した。退職後の今は、OBL会の会員となり、総会などに参加させていただき、懐かしい方々にお会いできる機会があることに感謝している。



忘れられない復興支援活動

岡本 宜久 (1954年生まれ/直属支部)

1979年9月—2013年5月書記、以降全労済へ転籍

忘れられないのは、2011年の東日本大震災に伴う復興支援活動だ。自治労本部が各都道府県本部に協力を呼びかけ、各県本部のグループを活動単位とし、4月10日から被災地での災害支援を開始。さらに6月4日の第9グループからは行政支援が本格化した。

道本部が担当した岩手県内の自治体労組は、自治労加盟と自治労連加盟があり、被害が甚大な沿岸部のほとんどが自治労連加盟であったことから、事前説明で自治労本部から「支援内容（範囲）は必ず守ること」と注意があった。さまざまな調整の上での支援開始となったのだろうことは想像できた。

このような中、私が参加した第10グループは、宮古市から南に約30kmの山田町役場で①避難所運営 ②仮設住宅入居手続の補助業務が中心で、地元職員が通

常業務をしてもらうことを前提としていた。

しかし、現地では自治体職員といえども被災者で、生活再建は住民同様早急に行われなければならない状況だった。参加者の「少しでも役に立ちたい」という思いは共通していた。

補助要員ではなく、個別事情として交代を申し出た。その結果、1週間かかると想定された仮設住宅駐車場の看板、番号作成と取り付け作業が1日半で終了。「補助業務」の範疇を踏み出したが、現地事務局には事後報告した。引き継ぎとして「充実した10日間だったが自己満足ではと迷う日が多かった。しかし、現地に入り少しでも役に立ててよかった。やれることは積極的にやった方がいいよ」と話したのが、偽らざるところだった。



ある苦い思い出、負の遺産のこと

田部 徹 (1944年生まれ／釧路市職労)

1979年10月賃金・調査部長、80年10月組織部長、82年10月賃金調査局長、84年10月調査室研究員、85年10月賃金・合理化対策局長、87年10月賃金・合理化対策部長、88年10月政治共闘部長、90年10月副委員長、93年10月調査室長、96年10月自治研常務理事、2001年10月-2004年9月運動史編纂室事務局長

80歳に近づき、足腰、聴力の低下が顕著になった。現役をはずれて20年弱、振り返ってみると、自分としては70年代から80年代にかけての自治労運動の発展に単組や、全道の格差解消の賃金闘争に少なからず寄与できたと自負している。同期の執行委員、鈴木泰行(全道庁)、岡田俊之(八雲町職)両氏は、その後道議会議員の場に転じた。

私が道本部に出た時期は1980年で、83年には横路知事が実現。その年の春開期、道庁の12階から1階まで全道庁執行委員の案内で春闘職場オルグをやったことを思い出す。最後には声がかすれてしまった。

最後の仕事は自治労道本部運動史第2巻の編集だった。自治労事件の記述には少し苦労した。編集作業をして思ったことは、合理化事件のことだ。中山峠の施設は常に政争の道具とされた。施設には

かつて臨時職員で、単組のたたかいで正職員となった20人余の組合員が働いていた。

組織内首長が誕生したが、賃金切り下げが提案され、組合の反対で施設の売却、そして職員の全員解雇に提案を変えてきた。この時、施設売却と職員の解雇が強行された。この大量解雇事件は全国紙にも大きく取り上げられた。

賃金の切り下げを受けても解雇は阻止し、職場を確保するという方針が必要だったのではなかったか、と今でも思っている。解雇された組合員の生活は一変した。

運動史には成果、良かったことが主として書かれるが、そこに組合員が存在したことを考えると、敗北の事象を書くことも次の組織の建設には不可欠であると考える。



心に響いたスローガン

谷川 広美 (1959年生まれ／直属支部)

1980年4月書記、2007年10月教育情宣部長、13年10月会計部長、19年10月再雇用書記

80春闘の真ただ中に道本部の書記 になった。加森ビルの2階にあった書記

局には発送室もなく、毎週火曜と金曜日の全単組発送は、中央にある島の机上を片付け、役職員一斉に発送作業をした。その頃は春闘も盛んで職場に貼るステッカーなどが大量に自治労本部から届き、必死に作業をした。早朝、昼休み、夕方の集会も多く、友人との約束もドタキャンで信用をなくしたものだ。

1カ月経った連休明けには衆参ダブル選挙になり、先輩に連れられ、札幌駅北口の八重洲ホテル（現在のバス乗り場）に設置された、小林恒人衆議候補（国労出身）の選挙事務所に派遣されたのが懐かしい思い出。

現在と違って、女性書記は自治労共済や財政局の担当が主で、執行委員会の参加は役員と男性書記の時代だった。しかし、徐々に専門部に女性が配置されるよ

うになり、全員参加があたりまえになった。

働きはじめて40年以上過ぎたが、こんなに働き続けるとは想像もしていなかった。当時、青婦部の「結婚しても出産しても働き続けよう」のスローガンが心に響き、それを初めて実践していた先輩、藪さんの背中を追いながら無我夢中だった。娘2人は、生後57日目の首も座らない内から保育園に預け、熱を出したらお願いする人を探す。本当に綱渡りのような日々だった。

右も左も分らなかった私が働き続けてこれたのは、公私ともに先輩たちの指導にほかならない。道本部で働かなければ得られなかったことや、多くの方々とのつながりは、どれもこれも私の宝だ。



北海道に婦人部は喫緊の課題だった

榎 昌子（1945年生まれ／全道庁労連）

1981年10月－84年9月青年婦人部副部長

1979年から全道庁札幌総支部青婦部長として、その間、全道庁本部青婦部の役員も兼ねて2年間職場から離れていた。その後、必ず職場に戻ると表明していたが、引きつづき3年間、道本部青年婦人部副部長を担う決断をした。

75年、自治労本部婦人部長に北海道から送り出した木元弘子さんを支えるには、北海道に婦人部をつくるのが喫緊の課題だった。婦人部大会など中央に行く機会ごとに、それを実感した。独立にむけての課題は何か、何から取り組んだ

ら良いのか。女性の活動家・組合運動を担う女性を増やす。「基本組織にあたりまえに女性役員がいる組織づくり」と言っても簡単なことではなく、当時自治労本部で提起した「母性保護運動強化月間」を中心にして取り組んでいくことにした。

記憶では当時のスローガンは、「結婚しても出産しても、健康で安心して働き続けられる職場をめざそう」だったと思う。

結局、私の専従中には独立は達成でき

なかったが、必ず職場に戻ると約束していたので選択は決まっていた。副部長を引き受けてくれた上士幌町職の池上秀子さん、送り出してくれた上士幌町職の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいだ。

全道の単組の皆さんに支えられ、助けていただき、なんとか3年間の任務を果たすことができた。最後に、書記局の女性書記の方々にも感謝だ。顔を見ると気持ちが和らいだものだった。



心に残る「横路再選めざす道知事選」

金田 文夫（1949年生まれ／函館市職労）

1984年10月組織部長、88年10月自治体部長、90年10月賃金・合理化対策部長、93年10月書記長、97年10月副委員長、01年10月－03年9月書記長

道本部専従役員として19年間、さまざまな運動課題に携わった。

思い出はつきないが、特に心に残るひとつが、横路知事2期目の再選をめざす1987年の道知事選挙だ。この選挙は、横路道政を盤石なものにするため、大量得票と与党道議の議席増が目標だった。当時の社会党・全道労協は労組中心の支持者獲得運動を展開する一方、支持者の幅を広げる取り組みとして、後援会（みんなの会）の組織化と会員拡大を追求した。そのため86年9月から主力単産（産別）派遣者を加えた専門チームを立ち上げ、私も一員として参画した。その時点で後援会は、主要都市などの一部市町村に止まっており、多くは未組織だった。そこでスタッフが分担して、当時の地区労や

単組、各級議員等と連携し、組織化に集中。道後援会とも連携し、会員だった上田文雄弁護士（後の札幌市長を歴任）も私たちと行動をとともにした。

横路知事が推進した「一村一品運動」や市民運動グループの関係者に、各地で中心的役割を担っていただいた。約半年間で全道200を超える市町村で、みんなの会活動を展開することができた。選挙結果は211万票を獲得、道議11議席増の大勝利だった。勝因は横路人気の高さ、党と労組の強固な基盤の存在、加えて、後援会による幅広い集票活動ができたことだと確信している。

今後の知事選で、このような取り組みを再現してもらいたいと、願っている。



特命の労働戦線統一問題

峰崎 直樹（1944年生まれ／全道庁労連）

1985年10月調査室事務局長、90年10月－91年10月調査室長

1980年代の後半、労働組合運動は、民間における労働戦線の統一問題が浮上し、官公労でも問われていた。100万人超の組織人員を誇り、総評事務局長に真柄栄吉さんを輩出していた自治労が、どう結論を下すのか注目を集めた。当時の自治労本部委員長は北海道出身の丸山康雄さんで、出身の道本部がどう決定するのか、官公労の中で占める自治労のウエイトが高く、大袈裟に言えば全国的にも注目されていた。

私は当時道本部調査室長で、特命で労働戦線統一問題の任務を与えられていた。極めて政治的な性格を帯びた課題で、北村英人委員長や後藤森重書記長らとのしっかりとした話し合いが不可欠だった。

ある時、本部の三役室担当者から全道労協議長だった森尾昇さんとともに呼ばれ、本部として労働戦線統一にむけて舵

を切りたいが、拡大闘争委員会での、原則的な立場の道本部発言が、やや「消極的」で、丸山委員長も頭を悩ませているとのことだった。

この問題は、我が家に近い後藤書記長の自宅で労働戦線統一問題の意見交換をしていた。その内容は北村委員長も含めて合意に達し、当時の『自治労通信』に後藤書記長名で投稿、以降、自治労の「連合」への道が大きく開けることへと結びついた。もちろん、各県本部の活動家にむけてオルグ活動を展開し、おおよその合意を得ていた。労働戦線統一を事実上決めた山形大会での各県・ブロックの発言は、後藤書記長の賛成論文の影響で大きな道が開けた。その後、私が参議院議員に立候補する時も、後藤さんの家で話し合ったことが、忘れられない思い出だ。



初の取り組み「反核平和の火リレー」

天野 信二（1960年生まれ／名寄市労連）

1987年10月－90年9月青年部長

「なに？おれに走れってか… わ、わかった」。

88年夏、泊原発への核燃料搬入・稼働を控え、反原発運動は全道労協を中心に稼働の是非を問う、「道民投票条例制定を求める100万人署名運動」を軸に盛り

上がっていた。青年は「反核平和の火リレー」を初めて取り組み、幌延から札幌、泊へ、盛夏暑さに負けず、数多くのランナーと応援・集会参加、自治体庁舎前の中継集会。夕刻は「反核平和の火の集い（屋内集会）」が連日つづいた。その合間、

札幌へ戻り会議の中で、「ここまで来たら森尾昇全道労協議長(元道本部委員長)に走ってもらいたい」と声があがり、その夜、ご自宅に電話をした。「議長、何とかお願いします」。しばし沈黙後の返事が冒頭の言葉だ。数日後、岩見沢市役所前出発集会に「いちランナーです」と森尾議長自作の反核アピールTシャツ姿は、今も忘れることができない。

青年の「平和の火リレー、100万筆署名運動キャラバン」の初日、道庁前で街宣車のマイクを持った。「なんでこんなに人が…」とその注目度の高さに身が引

き縮まった。

「北海道で広島の火が見られるなんて…ありがとう」。どの集会であったろうか、あいさつのあと、初老男性に声をかけられた。道内在住の被団協会員で被爆者の方だった。驚きやいろいろな思いがあり、「頑張ります」としか言えず会話にならなかった。

「反核平和の火リレー」は継続され30数年、今思えば当時は28歳、力不足や至らぬことばかりで恥じるが、まわりの皆さんに助けていただいたことに感謝したい。



わずか2年1カ月、色々ありました

山口 芳生 (1950年生まれ/全道庁労連)

1989年10月組織指導部長90年10月-91年10月自治体部長

『人生いろいろ』ではないが、全道庁空知総支部専従書記長3年に引き続き、道本部専従を2年1カ月、短い期間だったが本当に色々なことがあった。

前段は、未加盟対策、各種学習会(新入組合員、青年・女性)講師が多く、そのほか春闘や合理化反対闘争など全道各地の市町村職場を飛びまわった。

また、横路孝弘知事2期目の後援会「みんなの会」で企業回り、本番前2カ月間は、日高支庁選挙区の岡本修全道庁組織内選対。同年の衆院選で、北海道4区の組織内中沢健次選対。この時は、自宅が徒歩3分にもかかわらず、書記の松尾さんと事務所に泊まり込みもした。

自治体部長としては、北海道との統一要求書づくりの交渉窓口として、道担当

と事務折衝を繰り返し、その後の道職員生活に生かされた。このほか、北海道開発局の千歳川放水路計画の検討委員。北電泊発電所初の防災訓練。三重県伊勢市で開かれた自治研全国集会の運営委員。分科会では、長良川河口堰、千歳川放水路計画やダム問題が議論され、報告書作成で長島温泉で缶詰になり、分科会報告2万字を一晩で書き上げる貴重な経験をした。これで職場復帰が1カ月遅れた。その後、異動先の職場の皆さんの協力で、年次休暇を取り宮崎県の全国食と緑を守る集会や千歳川放水路計画関係学習会、全国自治研集会最終評価会議などの残務整理もあった。

いずれにしても、当時の後藤森重委員長ほか役員、書記の皆さん、特に、松尾

さん、藪さんにはお世話になり感謝している。



根室市職労再建に全道動員

植田 正実 (1955年生まれ／全道庁労連)

1990年10月－92年9月指導部長(92年1月－7月自治労本部派遣)

2年間の指導部長任務を全道の仲間へ支えていただき、まっとうできたことが30年経っても実感している。時系列に記憶をたどると、全道庁上川総支部書記長の任務を終え道本部には10月に着任した。12月から、翌年の統一自治体選で知事3期目の「横路孝弘」選対で福祉・イベント担当となり、さまざまな先手を打った取り組みが圧倒的勝利となった。

3月末に道本部に戻り、当時唯一自治労を脱退していた根室市職労の再建の取り組みを、都市連代表者会議などを経て4月中に了承を得た。ゴールデンウィーク前から宮野敏文書記が現地入りし、私も合流。市役所や全道庁根室総支部有志と全道動員にむけた作業を進めた。6月上旬、約200人で行動。出勤時の街宣、日中の職場内オルグ、夕食後職員宅訪問

オルグを3日間実施した。道本部後藤森重委員長を迎えて、市役所内有志の新たな根室市職労を再結成をすることができた。

労使交渉等のルールを基本とする市当局との協議が整った7月に道本部に戻り、全道野球大会の準備に入ったが、宮野書記は、その後も組織運営に係る指導などで、しばらく根室市に残った。

しめくくりは、翌年7月の参議院選挙だ。比例候補「山口哲夫」の3期目のたたかいで、年明けと同時に、候補秘書任務の臨時中執として自治労本部政治局に着き、特に東日本の自治労組織と、応援してくれた全農林など他単産の職場に、現地県本部専従者の案内で訪問して歩いた。任期の6割が外での任務になったが、自分の最高の財産となっている。



考え方の基礎、自治労で学んだ

浅野 由恵 (1970年生まれ／直属支部・旧姓阿部)

1992年11月－99年12月道本部書記

自治労道本部結成60周年に心からお祝い申し上げます。

私が働かせていただいたのはバブル崩壊の直後で日本経済が停滞し、雇用情勢が悪化に向かう大変な時代だった。父が

組織内市議だったご縁もあり、1992年に書記として採用され、自動車共済や女性部、衛生医療部、公共民間、財政局を担当し約7年間の在籍だった。諸先輩方や役員の方には、仕事や活動について丁寧

に教えていただいたことを今でも感謝している。

社会人としての自覚や平和への思い、社会活動の考え方の基礎を自治労で学んだ。特に印象に残っていることは、女性部での活動で、「男女雇用機会均等法」について、教科書以外で学ぶことができたことだ。実際にそれぞれの職場でたかかっている先輩たちの活動に深い感銘を受け、不平等な社会を変えたいと考えるようになった。

現在、女性が働き続けることがあたり前の時代は、諸先輩の努力の上に成り

立っていることを理解した。

また、親になって思うのは、未来の子どもたちに絶対戦争を経験させたくないということだ。ロシアのウクライナ侵攻など世界情勢が悪化の一途をたどる中、平和な社会を願わずにはいられない。このような思いが強いのは自治労での活動経験がかなり大きい。私生活ではパートナーとなる元青年部長の浅野康敏と青年部の活動で知り合い、現在に至る。7年と短い在籍だったが、組合員の家族として今でも繋がり、私の人生に深く影響を与えている。



印象に残る奥尻町職の自治労加盟

與田 敏樹 (1957年生まれ／七飯町労連)

1993年10月指導部長、95年10月－96年9月教育情宣部長

道本部在籍中で、一番印象に残っている取組みは未加盟未組織問題だ。特に奥尻町職と熊石町職に通った回数は数え切れない。

担当して3年目に、奥尻町職がようやく自治労加盟の臨時大会を開催するところまで漕ぎつけた。当日は、奥尻町の旅館で檜山ブロック専従の笹浪さんと待機していた。そこに飛び込んできた情報が、加盟に積極的な組合員が多い自動車整備工場（直営）に、残業命令が出たのだ。加盟つぶしのための嫌がらせだった。そんな状況の中、大会がはじまる時刻になり、待機場所の旅館は重苦しい雰囲気包まれた。

どのくらいの時が経っただろう。執行部の方々が「加盟できました！！」と、

大きな叫び声とともに私たちのところに飛び込んできた。

すぐに金田書記長に連絡し、翌日、遠軽出身で自治労共済専務理事だった田川靖一さんにも報告した。一言「そうか」で、次の言葉が「熊石はどうした？」だった。多少ねぎらいの言葉があってもと、同じ遠軽出身で町村連代表幹事だった高柳さんに愚痴をこぼした。ところが、同じような答えが返ってきた覚えがある。遠軽の血筋か…

奥尻町職加盟から2年後に、熊石町職も無事自治労に加盟した。ちなみに、私も町村連の立場で関わりをもっていたが、この時は私から田川さんに報告しなかった。

時のめぐり合わせが大きい、未加盟

組織の自治労加盟に多少なりとも貢献できたことは、のちの労働運動を含めた自

分の人生にとって、大きな財産となった。



世界の女性運動と地方の現実

広田 まゆみ (1963年生まれ/全道庁労連)

1993年10月—95年9月女性部長

全道庁女性部長の2年を経て、道本部の女性部長を2年間務めた。その後、道庁に復帰した1年後、一身上の都合で道庁を退職、人口約3200人の農村に移住し、約7年暮らした。専従期間は、婦人部から女性部への名称変更という大きな流れなど、国際的な女性運動を現場に提起してきたが、道内市町村の女性たちが直面する地方の現実に向きあい、反省もした大きな7年であった。

私が専従当時の執行委員会は、女性が女性部長1人という時代だった。世界公務組合の会議には、常に女性枠があり、多くの会議に参画し大きな学びになった。オープンショップ制のもと、組合員のための取り組みを明示することが必要で、多様性に直面する各国は、英語教室や、コミュニケーション、リーダーシッ

プトレーニングのコースが設定されていた。さらに、必ず女性対象の研修プログラムもあった。印象的だったのは、講座を担当したファシリテーターが、オーストラリア公務組合に所属する20代の女性だったこと。日本とは違いリーダーや、ファシリテータを養成し、リーダーになることを、明確に目的化していた。これを、婦人部から女性部への名称変更をとおして、地域の現場に導入できないかと、若き日の無謀なチャレンジであり恥の多い専従時代であったと。

最後に、多くの組合員、役員のみなさんや、自治労本部の後藤委員長に折に触れて、励ましていただいたこと。特に、全道庁・道本部の書記のみなさんに、厳しく温かく育てていただいたことに感謝し、道本部60周年を心からお祝いしたい。



伝説の「ポリタンク抗議行動」

吉田 雅人 (1966年生まれ/上川町職労)

1994年10月—96年9月青年部長、2009年4月組織拡大オルグ(自治労本部北海道配置書記)、18年2月組織拡大専門員

道本部専従経験のある方は、「なかなか激動だった」と感じられるだろう。自分もそうだ。青年部長となった直後、「寒

冷地手当支給基準の見直し」が人事院報告で示された。北海道ではまさに死活問題で、翌年の「勧告期」にむけ道本部一

丸のたたかいが展開された。

1996春闘では、伝説の「ポリタンク抗議行動」と称して20Lポリタンクに怒りのメッセージを投函し、人事院に全単組から送り付ける荒業を提起した。後日談だが、金田書記長に人事院、総務省から苦言が寄せられたと聞いた。大量のポリタンクが霞が関官庁の書庫に山積みされたとか。決して嫌がらせではなく、積雪地の率直な思い、灯油の重さをぶつけたかったのだ。現代では「炎上」の要因になるので止めた方がいい。

同時期、1月阪神淡路大震災、3月地下鉄サリン事件で、社会不安が高まる中、4月の知事選で堀達也道政が誕生。阪神淡路大震災では、自治労ボランティアが

始動し、全国の青年部員を動員。被災住民に携わる仲間の細かな対応や情熱を感じた。時代は、「自社さ」による村山政権。95人事院勧告で寒冷地手当が見直され敗北したが、単組では味わえない「みんなで取り組む」成果を感じた。

2年の専従期間を終える頃、自治労本部青年部長で東京に。道本部では、青年部の予算が足りなく「ピースカンパ」を提案。本部では「青年女性憲法フォーラム」「青年女性オキナワの旅」を企画、今も継続されている。

09年、現在の組織拡大専門員として公共民間職場や非正規労働者、消防職員の組織化を担当しているが振り返るにはまだ早いだろう。



旧民主党結成と新民主党の結成

大門 正彦（1954年生まれ／全道庁労連）

1994年10月自治体政策部長、96年10月政策部長、97年10月－98年9月政治部長

執行委員として政治と政策を担当したが、1996年の旧民主党と98年の新民主党の結成は、今日の政治状況にも繋がるだけに、任期中一番記憶に残るできごとだった。

社会党・社民党の新党結成方針を自治労本部は積極的に支持し、その後の旧民主党の結成まで大きな役割を担い、道本部も中央本部を支えるだけでなく北海道で中心的な役割を果たした。しかし、旧民主党の結成時の「排除」「選別問題」で旧民主党と社民党が分立し、旧民主党を含む4党の合併により誕生した新民主

党に社民党は合流しなかったことから、自治労としても道本部としても、政党支持問題は大きな議論を呼ぶこととなった。

第18回参議院選が迫る中で、自治労は全国比例に高嶋良充、北海道選挙区に峰崎直樹を擁立してたたかう上で、新民主党支持を組合員に理解してもらう必要があった。そのため、事実上第18回参院選に突入している最中の98年5月、道本部第86回中央委員会で、参議院選挙闘争方針とあわせて、新民主党を支持する理由の附帯討議資料として「民主党の基本理念・基本政策に対する今日段階の道本部

の分析と見解（案）」を提起した。連合や自治労本部も示していない段階での新民主党の分析と評価と見解で、参考資料もないだけに、見解（案）の作成には随分苦労した。幸い中央委員会でもほぼ異

論なく承認されたことで、道本部は新民主党支持でまとまることができた。また、連合北海道や民主党北海道、さらには自治労本部にも見解（案）が一定評価されて安堵したことが思い出深い。



地方自治は未踏の時代に輝く

佐藤 富夫（1948年生まれ／全道労労連）

1995年10月－97年9月副委員長、2001年10月－03年9月副委員長

私が2度の副委員長在職中（4年間）で最も辛く歴史的なできごとは、2001年の自治労事件との遭遇だった。再生委員の選任を受け、出発には豪雪で3日間を要して上京、年末年始をはさみ東京に50日間滞在しての任務だった。必要悪とされた積年の「負の遺産」が摘発され、自治労は組織存亡の危機に直面、委員長だった大原義行さんはその歴史的責任を一身に背負い就任わずか委員長を辞職したのだ。大きな期待と信頼を寄せていただけに痛恨の極みだった。

当時の私は、公共民間の仲間も含んだ組織の実態から「自治労という名も変えるべきでは」と主張した。今も自治労が再生される姿を遠くから見つめつづけている。かつて全道労協が北の総評と呼ばれ、北海道は労働運動の先進地域と高く

評価されたが、自治労北海道が現在も自治労本部の中核を担い続けていることに敬意を表する。

還暦を迎えた自治労北海道には、少子・高齢、人口減少に加え、コロナ過とデジタル化などの新しい未踏の時代が待ち構えている。60年という歴史のスタートラインに立ち還り、自治労北海道が住民自治と団体自治の架橋となって地方自治の基本原則を発展させ、北海道の地から地方自治の輝く時代を築いていくことを切に願っている。住民にとって地方自治は、民主主義を学んで積極的に政治や行政に参加する機会となる。「民主主義の学校」と言われる所以を現実と照らし合わせて見つめ直し、さらに何よりも「地域と住民の中へ」だ。



女性専従役員「ゼロ」は残念

佐々木 聖子 (1957年生まれ/江別市職労)

1995年10月-1998年9月衛生医療部長、98年10月臨時執行委員 (衛生医療担当)

女性部長以外で初の女性専従執行委員として、衛生医療部長を担った。一看護師が運動の先頭に立ち、右往左往しながらもつづけて来られたのは全道・全国の多くの仲間の力、支えのお陰だ。特に、道本部・単組・出身の石狩地方本部・担当した渡島地方本部・衛生医療評議会(全国幹事・全国医療・北海道医療)の仲間の皆様には大変お世話になった。今も1人ひとりの顔が目に浮かぶ。私の人生の宝物だ。

中でも一番の思い出は、道本部女性副委員長の誕生だった。四苦八苦しながらも札幌市職の相原久美子さんを第1号に、全道庁の山形千都子さん、小原康子さんとおつづいた。その後、相原さんは自治労本部執行委員から参議院議員へと駆けあがり、岩見沢市職出身の岸真紀子さ

んに引き継がれている。現在、道本部役員経験者は道議の広田まゆみさん、町議は京極町議の中村厚子さん、洞爺湖町議の石川邦子さん、士別市議の奥山かおりさんが活躍している。私は、単組に戻ってから専従書記長、副委員長を経験後、定年退職し、前任者の後継として、働く者の立場と、経営難の市立病院の経営再建による地域医療を守る立場で市議を引き継いだ。ちなみに江別市議会は定数25人中、女性が12人と全道比率第1位だ。

道本部でも2018年度は、青年部長をはじめ8人の女性役員が誕生し、全道庁の三浦和枝さんが書記長、副委員長を担った。23年度は、女性部長も非専従となり、女性専従役員が45年ぶりに「ゼロ」とのこと。残念な限りだが次期に期待したい。



定年の節目に「回想」感慨深い

土田 美登里 (1962年生まれ/北見市労連:旧常呂町職)

1995年10月-97年9月女性部長・専従、2016年10月-17年9月女性部長・非専従

自治体職員となって42年、組合専従として休職していた4年3カ月を差し引いても38年弱行政に携わってきた。高校を卒業し、地元の就職先であった常呂町役場で自治労運動と女性部運動に出会い、

38年間の自治労組合員として多くのことを学ばせてもらった。定年という節目のこの時に、自治労道本部時代の「回想」の寄稿 依頼がきたことに、改めて年月の重みと、ここまで頑張って働き続けて

きたんだという感慨深いものがある。

私が、最初に道本部女性部長で任務についた時期は、男女雇用機会均等法（1985年）改正（1997年）の取り組みの真ただ中で、中央行動で国会傍聴・座り込みなど動員がかかったものである。

男女平等法を求めていたにもかかわらず、日本政府が女性差別撤廃条約に批准するために、勤労婦人福祉法を改正しただけの「男女雇用機会均等法」10年後の改正だった。平等を要求するなら母性保護は撤廃すべき、保護を要求するなら平等は我慢すべきの議論が再燃し、各県

女性部が衝突することもあった。それだけ女性運動が盛り上がっていたのだと思う。均等法と同様に、育児・介護休業法も改正されつづけ、育児も介護も担いながら、働きつづけている女性や男性を職場で目の当たりにすると、両立できる職場をつくった一役に私も携われたのかもしれないと思う。

女性が働きやすい職場は、男性も働きやすい職場になるんだと訴え続けていくのはこれからも変わらないだろうが、少しずつ前進しているのはまちがいない事実である。



民間委託後、非正規職場が増加

浅野 康敏（1965年生まれ／釧路市役所労組）

1996年10月－97年9月道本部青年部長

道本部専従の際、釧路市職労は全官公系自治労連の競合組織があった。技能労務職の現業出身者で、しかも第2組合がある単組から出るべきかの不安を抱えてのはじまりだった。

当時は、保育や福祉職場だけでなく、現業部門の合理化もかけられた。退職不補充から職場の統廃合、さらに職種配転提案。1990年代後半は民間委託提案が相次いだ。単組や道本部で反対のたたかひがあったが、委託後の職場は、管理職と数人が正規で、あとは非正規という職場が増加。結果、1995年の「新時代の日本の経営」がめざしたものが自治体職場でも実行されることになった。

1997年のいわゆる「新行革指針」は、自治体で策定された「新行政改革大綱」

を具体的に実行するとして、定員管理や給与の適正化に関する情報公開を自治体に要請した。単組で退職不補充などの攻撃が進んだ背景がここにあることを見逃してはならない。

道本部専従の直後、自治労本部に青年部長で専従した。自治労は、1978年に「交流し、まなびあい、自治体合理化への産別抵抗を組織しよう」のスローガンのもと、「第1回自治労青年女性中央大交流会」がはじまり、専従中の1998年が第11回の開催年だった。中央執行委員会での取り組みを提起した際、「やる必要があるのか？」の指摘をうけたが、「全国規模で3000人が結集する集会はない。自治労運動強化のため継続していくべき」と主張し承認された。背中には、全国のたた

かう仲間と、意思統一された常任委員会 の仲間、そして道本部の支えがあった。



主体的に生きられる社会をめざして

佐野 幸子（1951年生まれ／新得町職）

1997年10月－2000年9月女性部長

日頃、過去を振り返る事がないため、貴重な執筆の機会をいただき、思い出してみたい。

私は、十勝の新得町から3年間、その任にあたった。あれから20年以上が経過し、現在71歳になった。現在も活動とは縁を切らずに続けている。

私にとって道本部女性部長の任務に就くということは、人生における三つの決断のうちのひとつだった。しかし、今まで知ることにも触れることもなかった世界に飛び込んで、貴重な体験と機会をいただけたことに感謝している。

日頃から職場や社会における理不尽な女性差別を強く感じて、なんとか次の世代には女性も主体的に生きられるような社会をめざしたいと思っていた。日本では1999年に「男女共同参画社会基本法」

の制定で、その達成にむけた自治体や、職場における「基本計画」の策定が求められ、自治労も取り組んだ。講演会では衆議院議員（のちに厚生労働大臣）の小宮山洋子さんをお呼びしたとき、「夫婦別姓は自民党も反論できないが、とにかく彼らは嫌いだから法案が通らない」と話していたことが印象的だ。あれから20年以上経過したが、まだ達成されていない。

連れ合いはその時、国鉄分割 privatization で首切りされ、帯広闘争団に所属し撤回闘争をたたかっていた。24年あまりのたたかいに、2011年3月解決を見た。同年に私も定年退職した。とても身も心も軽くなったのを覚えている。

自治労のますますの活躍・発展を今後とも応援している。



労働組合運動は社会正義の追求

岡坂 忠志（1964年生まれ／帯広市労連）

1997年10月－99年9月政策部長

退任後20年以上経過した。単組経験が浅い中、道本部執行委員となり、労働運動の猛者の中で自分が務まるのか不安だったが、振り返ると自分にとっての財産となっている。

私が執行委員の任を担っていた時代は、第一次分権改革の時で機関委任事務の廃止、国の関与に関する新しいルールづくり、権限移譲など、地方分権推進委員会の勧告に基づき、1999年7月に「地方分

権一括法」が成立した。特に機関委任事務が廃止され、国・地方が表面上対等の関係となり、地方自治体が地方政府としての責任と自覚が求められた。自治労が掲げる「地方自治を住民の手に」するため、大きく前進した時代だ。

一方で、人勧の値切りや不実施など、一部の自治体で地方財政の危機を理由とした理不尽な人件費削減攻撃があった。これと対峙するための理論武装と、各自自治体の財政状況も労働組合として、しっかりと現状把握する必要があった。私が

在籍中はこうした視点から、特に地財危機克服と真の分権改革を求めた集会を開催したと記憶している。その時の運動が現在の状況にどのような影響を及ぼしているのか分からないが、運動の継続こそが力で、求められているものだと思う。

産別帰属意識が希薄になり、今の連合中央を見てもあまりにも情けないと思っているのは決して私だけではないと思う。労働組合運動は社会正義の追求であり、このことを忘れた運動に未来はない。自治労の踏ん張りが必要だ。



人生の基軸は労働運動

相原 久美子 (1947年生まれ/札幌市職連)

1998年10月公共サービス対策部長、2001年10月-2003年9月副執行委員長

1986年、札幌市の非常勤職員（年金相談員）10年の現場勤務から、札幌市職の専従となり、1998年、思いがけない成り行きから道本部の執行委員として臨時・非常勤等職員や公共民間職員の組織化を担当することになった。

全道各地でお邪魔して思ったのは、公共サービスというのは公務員という一括りにはできない、さまざまな形態で働く人で成り立っている。その多くは守られる法律があるが、使うすべを知らない（組合がないことから、労働者としての義務は果たしても、権利が主張できない）状態にあった。

公共民間の清掃会社の交渉に参加し、「自分が雇う社員を、休みに田畑作業に使って何が悪い！」と言う社長の言葉に、

道本部の参加者がみな激怒したことを思い出す。おそらく今でも組合のない職場にはこのような実態があるのではないだろうか。

また、先輩たちが「女性副委員長を実現しよう」と議論を進めた結果、2001年に初代女性副委員長の任につくことになった。その後すぐ、十勝管内でストライキに突入するという単組に向かい、列車の中でどう收拾すれば良いのか悩みながら朝集會に臨んだ。結果は、粘り強い交渉と組合員の団結で、当初要求通り収束したことは、今も心に残っている。

自分の人生をたどると、札幌市職、道本部、自治労本部、そして参議院議員と経験させていただいたその基軸は、やはり労働運動で、組織に育てていただいた

のだと思う。

戦後生まれで、労働運動も学生運動も活発な中、教育も民主主義、男女平等と

育ってきたが、今の社会状況の時こそ「労働組合」が人のつながりをつくる上で必要だと切に思う。



地域に信頼される病院づくりめざして

澤田 誠悦 (1947年生まれ／全道庁労連)

1998年10月－2001年9月衛生医療部長

道本部で衛生医療を担当していた当時の内閣は小泉内閣で、聖域なき規制改革のもと、衛生医療職場にはすさまじい勢いで、理念なき合理化が押し寄せていた時期だ。自治体病院の現場では赤字財政が問題となり、病院現業や医事課が委託のターゲットとなっていた。労働組合も病院財政分析を行いながら課題解決にむけ積極的に取り組んだ。

当初は労働組合が財政問題に対応するののか、といった組合員から疑問の声もあったが、単なる財政健全化をめざすのではなく、赤字の要因を分析したうえで、自治体病院の役割を強く意識し、地域に信頼され、必要とされる病院づくりをめざした。さらに、自治体病院への一般会計からの繰り入れは行政経費であること

を主張して運動を展開した。

しかし、総務省から自治体に対しての圧力は相当厳しいものがあつた。ある自治体病院の病院食業務外部委託をめぐる折衝で、当時の助役は「現在、特に不都合はないが、何かやらなければならないんだ」と苦痛の表情で語っていたのを思い起こす。

定年退職後、障害者福祉の事業に携わっているが、新自由主義、成果至上主義はそのまま障害者福祉制度の中にも組み込まれた制度設計で、現場は追い詰められ混乱している。

岸田総理の「新自由主義からの脱却」も具体的には何の動きもメッセージもなく、単なるスローガンで終わってしまっそうだ。



じちろう共済の全組合員利用めざす

鈴木 知幸 (1972年生まれ／直属支部)

1999年4月－2013年5月書記、以降全労済へ転籍

入局してすぐに統一自治体選挙だった。テレビで見ていた議員が自治労組織内・推薦議員だったことを知り驚いた。初め

での電話かけ、目の前にぬいぐるみを置き、目線をあわせて支援のお願いをした。

青年部時代は過酷だったが、同世代と

労働運動を取り組めた楽しさ、幹事会議論から寝ないまま集会運営、幌延デーのスクラム、労働歌、公務員制度改革に対する青年部員の怒りを集めようと取り組んだ「怒りの赤旗行動（怒布）」。怒布をつなぎ合わせて、青年部総会の会場をぐるっと囲んだ光景はすごかった。しかし、つなぎ合わせるのは大変だった。

青年部議案の裏表紙に、自治労マークを入れたのも私たちの時代からだ。今なら、迷わずにじちろう共済の広告も掲載するだろう（笑）。

組織部時代、合理化提案が吹き荒れる中のたたかいでは、「反合理化闘争News」を作成し、「当局提案をはね返し

た」「要求を勝ちとった」「交渉中の単組は、先進単組に追従し、粘り強く交渉を」と、各単組の闘争状況を伝えた（この時代はFAX）。また、闘争中の単組を支援するため、交渉相手の町長・当局へむけた抗議打電行動などを提起し、単組のたたかいを、地方本部や道本部総体のたたかいにする運動を追求した。

常に、労働運動は厳しいたたかいの中にあるが、道本部は、運動の歴史をつなぎ、自治労運動、労働運動の柱として、存在し続けてほしい。

私は、組合員と家族の生活を守るため、じちろう共済の全組合員利用をめざしていく。



共働き配偶者の配置転換発令を撤回

友利 一男（1953年生まれ／網走市労連）

1999年10月政治政策局政治部長、2000年10月企画総務部長、03年10月副執行委員長、06年10月－2007年9月書記長

道本部には、8年間在籍した。この間、衆参の国政選挙や北海道知事選挙があったが、地方の単組では経験し得ないことに関わることができた。特に書記長時代に、比例で過去に例を見ない得票で相原参議が誕生した時、安心と大きな喜びを感じたものだ。

以下のできごととも忘れることのできない事案だ。

2003年の4月、空知地方本部のある町役場で、共働きだった管理職の配偶者に配置転換の異動が交付された。理由は「共働きに対する町民の厳しい視線を踏まえたもの」とのことであった。

公務員に対する厳しい声が強かった20年前の当時であっても、当局がそのことを理由とした人事異動は許されない不当行為であり、発令撤回にむけた取り組みがはじまった。

町職労、地方本部の支援も得る中で、理不尽でつらい立場におかれた本人と配偶者との連絡や、打ち合わせを頻繁に重ねるとともに、粘り強く当局に撤回を迫まった。当局も「公にできない理不尽な内容」であることを認め、発令を撤回させることができた。

このできごとは、単組・地方本部を超えて多くの（特に女性部員の）注目を集

め、その後の取り組みにも影響を与えることができたのではと思っている。また、密かに、岸まき子参議の誕生のきっかけ

になったのではないかと考えているところだ。



桃子の男女共同参画計画

三浦 和枝（1965年生まれ／全道庁労連）

1999年10月－2001年9月教育情宣部長、2015年9月書記長、19年10月－21年9月副執行委員長

「どうして私はいつもいつも洗濯なのでございましょう。私も山へ行きとうございます」。お婆さんが山に芝刈りにお爺さんが川に洗濯に行く。桃から生まれた桃子が鬼ヶ島に行き…。男女の役割に縛られないジェンダーフリーな話の連載を、機関紙の新年号でスタートさせた。当時道本部は「男女がともに担う計画」を策定して2年、計画が進んでいるとはいえ、男女の固定的役割分担意識（ジェンダー）から解き放すことをもっと身近なこととして簡単に捉えられないだろうかと考えていた時に、著者と物語に出会い「これだ」と感じたのである。

桃子は鬼ヶ島で男女共同参画計画を進める。日常的に何気なく交わされる会話や思考が、物語を読むことで固定的意識に捉われていることに気づけてもらえた

企画だったと自負している。

20年以上ぶりに読んでみたが、今読んでもおもしろい。

道本部が「男女がともに担う計画」を策定して4半世紀が経つ。女性の役員は増えてはいるが、未だ圧倒的に男性が中心である。

書記長の時に、女性役員対象のセミナーをはじめた。一方、あえて「男性役員対象」と銘打って男女平等講演会もスタートした。それぞれで新たな気づきを持ってもらえるよう進めてきたし、今後も続けて行ってほしい。

自治労運動は誰もが担えるものでなければならない。「男女がともに担う」運動は、多様性を認め合うことだと思う。計画の推進は自治労の組織と運動を強くするものだと確信している。



驚愕のできごと「逢坂・知事選不出馬」

崎廣 秀樹（1959年生まれ／平取町職労）

1999年10月政策部長、2000年10月政治部長、03年10月－12月臨時執行委員（政治担当）

第40回道本部大会で立候補し、何も知

らない田舎の活動家が指導部の中枢へ入

ることになった。しかも地方分権一括法も理解していないまま政策部長となったのだが、徐々に自治研活動が面白くなった2000年10月、山形自治研を目前に異動内示で政治部長に。労働運動でも異動辞令には逆らえず、それから3年間担当した。

2001年7月の第19回参院選では、選挙区に小川勝也さん、比例は1980年以来20年ぶりの全国区選挙となり、初の「非拘束名簿方式」で自治労組織内・朝日俊弘さんでたたかった。当選はできたが、獲得票は組合員数どころか悲惨な結果に終わった。その間、多くの自治体選挙も厳しいたたかいだったが、03年の第15回統一自治体選・札幌市長再選挙で上田文

雄さんの勝利は最高にうれしかった。多くの仲間の応援に感謝したい。

あとは、「幻の逢坂誠二知事候補」だ。03年2月2日午前、驚愕のできごとが起きた。「町長室日記」で、逢坂さんが「知事選不出馬」を表明したのだ。「THE OOSAKA」なる写真発言録の作成が遅れ、土日作業で月曜日の入稿予定になっていた。その土曜日午前中のことである。それからの混迷は大変なものだった。

最後は03年11月の第43回総選挙で、小選挙区7人、比例4人が当選。北海道完勝まであと1人だった。通常の自治体業務では得られない、貴重な経験をさせていただいた道本部に感謝だ。



将来的な担い手づくり意識

武山 和史（1969年生まれ／斜里町労連）

1999年10月－2001年9月青年部長

20世紀から21世紀に移り変わる時代の専従だった。行政「改革」の攻撃が強まり、職場や産別、地域運動など多くの課題を抱える中での取り組みが進められた。

2001年、出身単組の斜里町労連では、地方交付税の減額で予算が組めないことを理由に「定期昇給延伸」の提案があった。当時は「賃金独自削減」攻撃は少なく、道本部のオルグ（川本淳組織部長）や、青年部を中心に全道からの当局への抗議打電行動、単組青年女性部学習会、決起集会を取り組み、「一時金0.2月削減」で妥結した。私自身は道本部専従でのたたかいだったが、単組にとって心強い支援

は、自治労に結集してたたかう意味を感じる闘争だった。

その後、小泉首相による「聖域なき構造改革」のスローガンの下、交付税ショックは自治体財政の厳しさを強め、「市町村合併」を誘導する政策は、合併してもしなくても自治体の生き残りをかけて、民間委託をはじめとする定数削減や新規採用の凍結など、すべての単組に職場や賃金の合理化攻撃が強まり、「賃金の独自削減」は「流行り病」のようだった。

「青年部長の評価は10年後に決まる」という先輩の言葉が、強烈に印象に残っている。いかに「活動家」を育成するか、

将来的な担い手づくりを意識して運動をすることだと言われた。

青年部運動の柱は「学習」「交流」「実践」で、労働運動の基本。運動をつくる

のが難しい状況の一方でいつの時代も現場の労働者が悩み、困っていることを全体化して運動にしていくことができるのが労働組合の任務だと思う。



まさに活動の継続は力なり

岩淵 正洋 (1955年生まれ/札幌市職連)

1999年10月—2001年9月社会福祉部長

出身単組で10年間関連労働者の組織化、社会福祉評議会、労働安全衛生、反原発運動の5万人原告団を担当した延長線の活動として道本部の任務についた。当時は、介護保険制度導入、保育制度の充実をめざす課題から全国保育集会、障害者運動の発展によるDPI世界会議、自治労全国福祉集会の北海道開催。介護労働者をはじめとした関連労働者組織化などの集いがめじろ押しだった。当然、事前準備や参加者への周知の活動も頻繁に行い、単組時代はなんとかコントロールできていた体重が激増。不覚にも就任半年程で入院治療に1カ月半も離脱し、多大な迷惑をかける羽目になったことが最大の後悔だ。

ともあれ、多くの組合員、役職員、市民の協力のもと短い期間ではあったが任

期をまっとうできたことはありがたかった。訪問時に歓待していただいた多くの組合員みなさんにこの場をおかりして改めて謝意を述べたい。

単組に戻っても活動を続け、道本部の活動にも関与してきたが、後任の活躍もあって札幌市に子ども局ができ、札幌市職非常勤評議会出身の相原久美子さんを参議院議員に送り出し、生活保護のケースワーカーの配置基準を改善、まさに継続は力なりといった喜ばしいニュースにも多く触れることができた。福島原発事故はもっと力があれば…という思いだ。

現在は年金生活者を標ぼうしている身分だが、これまでの経験をいかして、まともな政治と社会を求めて行動する高齢者でありたいと考えている。



「逢坂不出馬」で幻の知事選挙調査

中島 章夫 (1948年生まれ/全道労労連)

2000年10月—08年9月総合研究室事務局長

私の任期は21世紀の8年間だった。印象深く思い出されること。

ひとつ目は、2003年知事選だ。横路道政3期12年を継いだ堀道政は、道政改革

を推進した面はあるものの、2期目では自民党との相乗りを推進するなど評判は良くなかった（道新世論調査でも堀道政支持は3割程度）。

道本部は堀道政の3期目はあきらめて、当時ニセコ町長だった逢坂誠二氏を擁してたかうハラを固めた。知事選挙直前の2003年2月1～2日、総研は北海学園大・山本佐門教授の協力を得て全道世論調査を実施したが、その最中に「逢坂不出馬」のNHKニュースが飛び込み「幻の知事選挙調査」となった。その後、この調査データを元にシミュレートした北海道知事選挙結果は、「逢坂160万票、高橋121万票、磯田40万票、伊東20万票ほか」。高橋、鈴木と今につづく自民党道政の19年間を考えると、実に惜しくもつたない機会を逃したものだ。

ふたつ目は、総研活動の作品を「総研

ライブラリ」に蓄積した。これはネット上で道本部ホームページとリンクさせたが、今はまさに「クラウド」化して、お化け屋敷のように漂っている。プロジェクト報告は、①堀道政検証・新しい道政改革・自治のあり方（支庁制度改革・上田市政研究など）、②自治労綱領「21世紀宣言」、国の基本政策検討委員会（憲法と自衛隊など）、③「民主党の研究」などがある。現在もつづく「直近の世論調査」など各種世論調査データや、組合員意識調査・春闘アンケートなども収められている。とくに「民主党の研究会」は、当時北大にいた山口二郎氏（現法政大）や宮本太郎氏（現中央大）の協力を得て実施した。のべ14回の研究会記録が残っている。翌2009年の民主党政権樹立への意欲や理論的意義が今見ても感じられる。



財政問題に翻弄された市町村合併

杉谷 光一（1955年生まれ／留萌市労連）

2001年10月政策部長、07年10月－2013年9月副執行委員長

道本部政策部長に就任し、早速の課題が「市町村合併問題」であった。当初は、国や道庁からの強制的な合併手法に対しては反対の立場で対応し、合併問題はまちづくりの方策で、市町村が自主的に判断するものとして各単組での学習会に赴いた。

道内の市町村は、道外のように自治体の境界がわからないほど密接しているわけではなく、また、歴史的にも道民のフロンティア精神で、他の自治体には負け

ないまちづくりに奮闘してきた自負心もあり、それほど合併は進まないだろうと思っていた。

しかし、2004年の地方交付税12%削減を契機に、合併議論が道内でも急速に活発になり、自治体当局の財政推計では、将来の自治体は財政難に陥るとして合併にむかう自治体や、市との合併で職員の待遇改善が期待される地域も出はじめた。

道本部としては、地方自治研究所と連携して「合併と財政問題」などをテーマ

に、セミナーや集会を開き、合併問題に対する対処方針を提起した。また、臨時執行委員として、南部谷和男さん(空知・胆振・日高担当)、木村春樹さん(渡島・松山担当)を配置し、合併時における組合員の賃金統合や組織問題についても尽力して頂いた。

合併後の地域は、自治体合理化として職員と議員の削減が行われ、想定されたように支所となった旧自治体地域の衰退に拍車がかかったが、合併を選択しなかった自治体は、人口減少化の中でも持続している。



タブーなし、勢い、やりたいことやる青年部

宮崎 渉 (1971年生まれ/森町職労)

2001年10月-04年9月青年部長

青年部長時代の心に残っている取り組みは2つある。「寒冷地手当削減反対」と「自衛隊のイラク派兵反対」の取り組みだ。

寒冷地手当削減反対の取り組みは、使用済みのスタッドレスタイヤに抗議メッセージを書き込み人事院に送りつける行動を、道本部青年部幹事会で決定し提起した。すると全道の単組・総支部からとんでもない数のスタッドレスタイヤが送られたため、人事院との交渉に影響が出て、高柳書記長や三上賃金部長と大喧嘩になった。私は青年部長の職をかけて、最後まで取り組みきったが、たぶん自治労本部が大変な状況の後始末をしてくれたと思う。

自衛隊のイラク派兵反対の取り組みは、イラク派兵が決まった旭川駐屯地で

の隊旗授与式に小泉首相が出席することになり、式典当日に青年部としてデモ行進を敢行した。道路使用許可申請の手続きのため、数日前に旭川中央警察署に乗り込み、半日以上も粘りに粘って許可を得た。駐屯地外周道路のデモ行進を無理矢理行ったが、急遽の取り組みにも関わらず上川を中心とした仲間が結集してくれたことを今でも思い出す。

私が専従だった頃は、基本組織の取り組みとは明確に違う、「タブーなし」「勢い任せ」で「やりたいことをやる」という、本当に青年部らしい青年部の運動だったと自負できる。そんな取り組みができたのも、素晴らしい仲間めぐり会えたことにつける。専従を経て得た「財産＝仲間」に感謝の気持ちでいっぱいだ。



均等待遇をめざして

杉原 太（1963年生まれ／七飯町労連）

2002年2月－05年9月公共サービス対策部長

私が自治労道本部に着任した2002年は、介護保険制度や地方分権の議論が盛んな時代で、公設民営による業務委託や指定管理者制度、労働者派遣法などの規制緩和が進められ、公共サービス民間労働者が増加する時代だった。

公務職場でも窓口業務や施設管理、ごみの収集運搬業務等の職場・職域での臨時非常勤等職員や派遣職員、公共民間職員の配置が進められていた。これは、当時の小泉内閣による「官から民へ」、「改革なくして成長なし」といった「聖域なき構造改革」によるものだった。

自治労に加盟する各単組は、同一職場内で正規雇用職員、臨時・非常勤等職員、派遣職員や公共民間職員といったさまざまな身分、労働条件で働く仲間が増え、正規雇用職員の減少と臨時非常勤等職員

の組合加入にむけた課題など、総合的な組織率の低下が懸念された。

私は道本部で公共サービス対策部長として、多様化する雇用形態に対応する組織づくりとして、臨時・非常勤等職員連絡会、公共サービス民間労組協議会、環境施設ユニオンの事務局を担当し、現場の第一線で住民サービスを担う臨時・非常勤等職員や公共民間職員の皆さんに直接お会いし、雇用不安や待遇の現状と課題について意見を交わし、同一価値労働・同一賃金の原則による均等待遇をめざしてともに取り組んだ。

道本部に在籍した3年間、全道の仲間の皆さんと議論を交わし、交流した経験は人生にとって非常に有意義なものとなった。ともに運動した多くの仲間に向けて感謝申し上げたい。



思い出よみがえる峰崎さんの選挙戦

出村 良平（1958年生まれ／全道庁労連）

2003年10月－07年9月財政局長

4年間の財政局長の仕事は多様だったが、政治闘争の思い出が多く蘇る。なかでも、財政局長に就任しての翌年の参院選の記憶、峰崎さんの3期目の選挙だ。当時の北海道選挙区の選挙情勢は2人区で、峰崎さんは連合型候補になったこともあり、情勢は有利に働くはずだったが、

その年に年金未納問題が起きたり、民主党道連がのちに旭川市長となる西川さんを2人目に擁立し、議席独占を狙ったため困難で厳しい選挙戦に突入することになった。民主党は自由党と合併し、拡大した直後のこともあり、政権交代も視野に入りはじめていた。私は自治労の政治

闘争の大きな目標の一つである労働基本権の奪還も具体的になってくるのではと期待した。峰崎さんの基本スローガンは「責任ある政治」。歳入庁構想を唱え、税と社会保障の見直しを選挙選で積極的に訴えた。社会の変革を強く意識し、自治労の政治闘争の意義を肌で直接感じる事ができた選挙戦だった。

一方で、情勢はジェットコースターのように変化し、最後は勝利することはできたが、同じ民主党の西川さんには

6万5千票まで迫られた。何度も事務所に泊まり込み、夜中に延々と電話対応したこともあった。冷や汗の連続、緊張感のは長く続き、選挙闘争の厳しさと難しさを体験した。その後、民主党政権を実現できたが、残念なことに自民政権に逆戻りし、長く無責任な政治が続いている。責任ある政治を実現するために、もう一度政権を獲得するために何が必要か、自治労の政治闘争を点検し再強化していくことが求められる。



「自治労北海道」の紙面改革

井上 昭弘（1953年生まれ／全道庁労連）

2003年10月教宣部長、04年10月賃金労働部長、07年10月－08年9月企画総務部長

2003年9月の道本部大会で執行委員に立候補、教育情宣部長となった。わずか1年間だったが、機関紙「自治労北海道」の紙面改革、固定欄の復活に取り組んだ。

まず「みねさん国会だより」は、山崎元参議の「ヤマさん国会だより」の峰崎参議版だった。組織内議員がいつでも何をしているのか、選挙時だけでなく日常的に伝えることは少しでも政治を身近に感じることにつながる。今は岸参議が引き継いでいる。

道本部役員書記のリレーエッセイ「身辺雑感」を「忙中余話」に改題した。1週間ほど悩んだ末の造語である。「忙中有閑」「閑話休題」などが浮かんだがいずれも新聞等に使用されていた。文末の署名は書記局内のリアル感を出したかっ

た。1988年頃まで「休憩室」という固定欄があった。書記局ネタが中心で人気だった。その復活を期待したのであるがプライベートもあり難しかった。

1面に、短文時評「朔風」を新設した。87年頃まで「寒流」という同様のコーナーがあり復活したいと思った。タイトルは時局をバサッと切るので「一刀両断」がすぐ浮かんだが他紙が使用していた。そこで、当時担当書記だった谷川さんと相談、会館北側のブロンズ像から拝借することにした。「北風に立ち向かい前進する」とある。超短文だが「社説」的な要素も持つ。時局テーマを歯切れよく批評しなければならぬ。教宣部長の執筆担当でいつも頭を悩ませた。今後もぜひ続けてほしい。



意思決定の場に女性の意見反映、参画

石川 邦子（1959年生まれ／洞爺湖町労連）

2003年10月－05年12月女性部長

私が女性部長を引き受けたことは無謀なことだった…。しかし、あの時があるから町議会議員になったと思う。お世話になった皆さんにとっても感謝している。

当時は45歳。地方本部の女性部長だった。単組では、みんなで女性部を立ち上げ「なでしこ」という教宣紙の発行などを取り組んでいた。

突然の道本部女性部長のお話は丁重にお断りしたが、当時の女性部長から、心に響く長い手紙が届き気持ちが動いた。同学年の男性が昇格しても、女性は昇格できない反発もあったのかもしれない。

町長に、「労働組合は男が行くものだ」と言われ、先輩たちが、「行かせてほしい」と説得してくれた。そうして女性部長になったが、組合運動に未熟で、今振り返っても穴があったら入りたい心境だ。

あのとときの反省や申し訳なかった気持ちを今、議員になって返していこうと思っている。

私の一般質問の内容は、「男女共同参画の推進」「ジェンダー平等」「各種ハラスメント対策」「職員のメンタルヘルス」などだが、特に政策に関する意思決定の場における女性の意見反映、参画に力をいれている。あのととき学習したさまざまな課題、女性部を通して聞いた皆さんの意見が、今とても参考になっている。

今後も組合を通して、積極的に多くの女性議員や女性管理職が増えることを期待している。育てていただいた皆さんとともに、地方議員から声を挙げ、「女性活躍推進」や「働き方改革」を実効性のあるものにするために、環境整備や意識改革を発信していきたい。



「平成の市町村大合併」と組織統合

南部谷 和男（1944年生まれ／夕張市職労）

2004年2月－06年9月市町村合併担当臨時執行委員

市町村合併対策執行委員として空知、胆振、日高の3地本を担当した。

前職（中澤健次衆議の公設秘書）の関連で空知の皆さんとは顔馴染みだったが、胆振・日高地本は中選挙区時代、地盤外であったため立ち入ることができず合併対象の単組の方々とはほとんど初対

面だった。しかし皆さんから大変懇切に接していただき、順調に活動できたことに感謝している。

「平成の市町村大合併」は、地方の人口減、高齢化が進むなかで、政府が自治体行財政基盤の強化と称し全国規模で推進したものであるが、関係自治体で構成

する合併協議会では山積する課題に対し個別の協議が深められ、特に街づくりや医療体制など住民生活に直結する事項が合併の可否を左右する案件だった。

自治労としては、賃金はじめ労働条件等の諸課題対策が中心で、各単組での連携を重ね賃金体系の整備や調整など精力的に取り組みが進められた。

組織の統合も大きな課題だった。なかでも安平町発足に伴い追分町職労と自治労未加盟の早来町職の統合にむけ、早来

町職の皆さんに自治労を共有してもらうため、自治労の意義やメリットなどを改めて紐解き、追分町職労の皆さんと対応を進め両組織の尽力のもと統合が達成された。

今後も地方をとりまく厳しい状況下にあつて、行政の第一線を担う仲間の連帯や自治研活動などの重要性を痛感するとともに、自治労運動の一層の前進を期待してやまない。



自治労の踏ん張りどころ

森次 敬一（1967年生まれ／浜頓別町職労）

2004年2月政治部長、05年10月政治部・道民運動部長、06年10月臨時執行委員（政治担当）

道本部からの執筆依頼をいただき、当時、自分への専従依頼、それも道本部役員としてお声掛けいただいたことに、仕事の忙しさに対する変化（逃避？）を想像し、恐れ知らずに、わくわくしていたことを思い出す。それは北の果ての小さな町の組合役員経験者の、まさに「井の中の蛙、大海を知らず」だった。

道本部では、道内全組合員や関係労働者のために力を発揮するわけで、当然、執行委員会をはじめ、議論の中身は深く重く、緊張と勉強の日々だったことを思い出す。

今回の執筆と、鬼木まことさんの参院選が重なっていたことに縁を感じている。政治部長としての最初の任務は、07年参議選で「あいはらくみこ」の必勝にむけた取り組みだった。投票日を待たず

に退任時期を迎えた際、勢いあまって「単組に戻り、あいはら候補の得票を組合員数×5を取ります」と宣言したことが今となっては良い思い出。結局、組合員数×2が精一杯だったが、今回の「鬼木まこと」さんをはじめ、数々の選挙結果の厳しさをみると、本当に自治労運動の踏ん張りどころだと感じる。

現在は、職場を中途退職し、地元単組のお手伝いをはじめ、連合や平和フォーラム、市民運動など、さまざまな労働運動に自由気ままに関わっている。政治部長の経験と多くの方々との出会いは、自分の町ですべきことの礎となっており、日々の活動につながっている。

道本部結成60周年をお祝いするとともに、自治労運動の前進にむけて、私も微力ながら関わりつづけたい。ともに頑張ろう。



自治体とは何かを考える機会に

木村 春樹（1963年生まれ／木古内町職労）

2004年4月－05年3月臨時執行委員（自治体合併担当）

2004年3月、渡島地方本部の専従職2年を終え木古内町への帰り支度を初めていたところに、一本の電話が入った。道内で進んでいる市町村合併の動きに対応して、福利厚生や給与水準の統合、画一化にむけての業務を、とのことであった。単組に相談し受諾、1年の休職延長となった。

法定協議会設置をはじめ合併の動きは道南で10以上あり、そして関係自治体の思惑が交錯し、意見が異なり、協議を解消したところも少なからずあった。ほぼすべての会合に足を運び、行政や議会のパワー同士がぶつかり合うなかで、協議会の解散を宣告された首長の顔面蒼白な姿や、地域100年の大計と訴えたにも

かかわらず無視された首長、議会議長同士が誹謗中傷しあうところも見た。なかには、新自治体の名称や本庁所在地をめぐっての応酬もあり、肝心かなめのことを内定しないで合併協議に走ったのか、と驚いたこともあった。

自治体とは何か、行政区域とは何か、そして地方自治体職員とは何のために存在するのか、改めて考える機会をいただいた。

その1年後、さらに継続を打診されるも、職場事情から戻ってくるよう要請され、復帰後の業務が、合併問題の端緒のひとつである財政担当だったのは皮肉なものである。



直営堅持から質の高い公共サービスへ

湊 修（1954年生まれ／網走市労連）

2004年10月－06年9月組織部長（現業公企担当）、10月臨時執行委員

道本部組織部長として2年間の短い期間だったがお世話になり、現業公企の担当として現業公企統一闘争と政策要求を軸に運動を進めた。特に大事にしたのはオルグや集会などを通して、各自自治体で公共サービスを担っている組合員と交流し、働く者の労働の価値観を共有化したいという思いで、公共サービスの充実と

労働条件の改善にむけ、ともにたたかうことを求めてきた。

当時、本部で現業が長期に渡って掲げてきた大きな柱の「直営堅持」方針を、「質の高い公共サービス」に改めた。当然紛糾する大会だったが、新たな方針が確立された。

自治労本部では、現業公企統一闘争の

たたかいて、確定闘争の1週間前に山場を設定していた。しかし、「評議会が独自では取り組めない」「評議会がない」「組合員がいない」などの理由で、要求書提出や交渉ができない。加えて各自治体財政の逼迫により、厳しい交渉が予想されることから、現業公企闘争の山

場を確定闘争と同日とした。その上で「基本組合と一体となって交渉の強化をはかる」、としたことが思い出される。当然、組合員や各地方本部、現業公企評議会総会で意見が出ることを心配したが、何とかクリアできた（石上組織部長にお世話になった）。



記憶に残る全労済との組織統合

三浦 正一（1960年生まれ／斜里町労連）

2005年10月 共済事業本部事務局長、07年9月 副執行委員長・自治労共済事務局長、13年10月－15年10月 特別執行委員・全労済自治労共済本部北海道支部事務局長

10年の在任期間中は、自治労共済の担当が中心だった。一番記憶に残っているのは、全労済との組織統合。就任2年目の2007年7月に申し入れがあり、09年8月熊本大会で、統合が承認され、13年完全統合となった。統合を決める大会は、賛成の立場で、最初で最後の全国大会発言となった。内容は、賃金関係と全労済統合、賃金問題で5分程度使ってしまった、7分ギリギリで緊張と焦りの発言だった。

次に記憶に残るのは、共済加入推進だ。当時、加入推進の学習会などは、共済本部任せだった。拡大の意識を根づかせるために、道本部との合同オルグからはじめて、職員講師による単組学習会開催につながった。取り組みの結果、一人ひとりの職員が成長した。ある職員から「単組学習会の場で団生に加入してもらえまし

た」と、うれしそうに報告してくれたことが今でも記憶に残っている。

その次は、休職専従者会懇親会である。離籍と同時に退会となったが、09年から10年の休職専従者会は、男女同数程度の構成で、なおかつ男女を問わず酒豪ぞろいだった。幹事も、男性から女性に代わり、懇親会の場所も変化した。お蕎麦屋さんの懇親会では、日本酒一升瓶を何本も飲んで店主をびっくりさせことや、その時のメンバーは今でも忘れずに覚えている。

最後は、全道庁労連の団体生命切り替えの取り組みだ。「やっと、長期共済に加入できる」という歓迎の声があった。印象に残っているのは、オルグの合間のスーパー銭湯や全道庁本部役職員、総支部役職員との懇親会なのはなぜだろう？



道本部は奮闘する組合員の道標に

越智 朱美 (1974年生まれ/砂川市労連)

2005年12月臨時執行委員 (女性部担当) 06年2月女性部長、
08年10月-09年3月臨時執行委員 (女性部担当)

結成60周年にあたり、今日まで北海道で自治労運動に尽力し、志を次世代に繋いでこられた諸先輩や仲間の皆様に改めて敬意を表したい。私は2005年に女性部書記次長、06年から08年まで女性部長として専従で道本部運動に参画した。出身の空知管内、夕張市の財政破綻により、地方自治について深く考える機会を持つこととなった専従初年。翌07年には雇用の格差問題等を掲げて出馬した道本部出身の相原久美子参議が50万票を超える得票で誕生。政権交代を迎える直前、政権に対する国民の不信感が募っていた激動の時代に専従役員を担った。

また、女性部の課題も、女性差別問題からワークライフバランスや非正規雇用の問題と、広く男女や雇用に関わる課題

へと多様化した時代だった。目まぐるしく変化する社会情勢の中、経験未熟ながらも目的を見失わず、運動にむき合うことができたのは、事あるごとに夜中まで熱い運動論議にお付き合いいただいた、諸先輩や仲間の役員の皆さんのおかげだ。その時に培った経験は、さまざまな局面での決断、判断力の礎となり、今もなお、仕事をする上で生かされている。

自治労は地域の行政サービスを担う労働者の組合として、常に自らの労働条件の改善とともに公共サービスの向上についても取り組んできた。情報があふれ、不確実な時代に直面しているが、道本部は、道内各地で奮闘する組合員の道標となる組織として、今後ますますのご活躍を心より祈念したい。



おお、ダブルブッキング

平川 則男 (1960年生まれ/全道庁労連)

2006年10月社会福祉部長、07年10月-08年9月公共サービス政策部長

道本部に本格的に着任したのは2007年4月。そんな中、頭を悩ませたのは、7月の「自治労全国保育集会」札幌開催だ。この集会は、1500人規模で全国から保育士が集まり、開催県本部はかなりの苦勞を強いられる。しかも私は、全道庁

労連出身で、保育所のことはあまり知らなく、当然、保育集会に行ったこともない。そのため、企画や運営も、本当にできるのか不安の渦の中にいた。

その最たるものは、集会1日目のオーブニングアトラクションの選定だった。

そこで、札幌市職の保育部会からヒントを得て、「子どもミュージカル」の団体をお願いすることになった。しかし出演料が高すぎ断念する結論を出し、代わりに別の町の子ども吹奏楽団をお願いし、ミュージカルの団体に断りの電話をしたつもりだった。

ところが、少しして保育部会の人から、「子どもミュージカル、保育集会にむけて熱心に練習しているよ」と話があり、確認したところ、先方から「格安で出演します」との回答。「おお！このままでは、

ダブルブッキングだ」と目の前が真っ白になりかけた。最終的に吹奏楽は、2日目、自治労会館5階ホールの分科会で演奏してもらうことで決着。なんとか収まりをつけ、道本部社会福祉評議会・保育部会幹事の協力で集会は無事に終了した。

こうした経験が後々、役にたったのかわからないが、自治労、内閣官房、連合、連合総研と職場を転々としても、子ども子育て支援制度や保育制度、そのための財源確保策の議論に、自治労の仲間に支えられながらに関り続けることができている。



人件費削減の嵐吹き荒れ

檜部 浩二（1961年生まれ／全道庁労連）

2007年10月－15年9月賃金労働部長

時の流れは速い。あれから15年が経った。任務に就いた時は、過去に例のない公務員給与の大幅な見直しで、国家公務員には給与原資が確保されるが、地方公務員の原資は縮小、平均4.8%水準低下の「給与構造改革」直後だった。さらに交付税改革が強行、歳入の確保に職員人件費を充てるなど、人件費削減の嵐が吹き荒れ、指導部として頭の痛い時代だった。

2009年9月からの民主党政権時、念願の労働基本権回復にむけた「自律的労使関係制度の確立」の取り組みは画期的だった。最終的に審議未了廃案になり、自民政権以降は一切議論がない。課題の全体化に努めたが、十分にやりきれなかった思いが残った。

また、400万円以上の退職金の削減、60歳台前半の年金非支給時代の定年制

延長の議論や再任用制度の拡充、公的年金一元化に伴う地方公務員共済組合制度の改革。12年の自民政権による、地方交付税削減と地公給と減額の暴挙。給与構造改革をさらに2%深掘りする給与制度の総合的見直しと、地方公務員給与の水準低下が続いた。そんな時だからこそ、将来を見据え賃金闘争のスペシャリストをつくりたいという思いで、道本部学校の「活動家育成講座」を設け、賃金課題に特化して講座をスタートさせた。

退任して7年が過ぎ思うことは、8年という長期間の任務で、精神的にも肉体的にも非常に厳しかったが、単組では経験できない制度課題に挑み、労働運動に関わっていた37年間で一番充実した時期だった。任務を与えていただいた道本部に心から感謝したい。



現業・公企評議会活動を発信

灰野 由希子 (1961年生まれ/札幌市労)

2009年2月-11年10月組織部長 (現業・公企担当)

単組の役員として中央委員会や、現業評議会、地本の集会などに参加はしていたが、道本部役員・書記の方たちとの直接のやり取りはなく、漠然と仕事の把握をして、皆さんの前であいさつをしたのを覚えている。

「現業職だけパソコン操作はできますか?」「女性に組織まわりは大丈夫ですか?」など、今ならハラスメントになりそうなことを言われてへこんだ時もあった。しかし出身単組の委員長に「自分ができることをやれば良い。現業・公企評議会が何をやっているかわからないから発信することが必要だ」の言葉と、毎日、道本部の活動を発信している谷川教宣部長を見て、私もニュースを作成し、各単組での現業・公企の活動を知ってもらおうと、不定期だったが発信した。当

時は女性役員が多く、出張のない日の昼休みに、お弁当と一緒に食べながら、わからないことを聞いたりした。

冬期の出張では、次の日の出張に間に合う交通機関がなく、自家用車で単組にむかったこともあった。留萌へ行った時の帰り道には、吹雪になり高速道路でインターを通過するたび、ラジオから「〇〇インター通行止め」と聞こえ、帰れるのかな…、明日出張できなかつたらどうしよう…、どこかに泊まった方が良いのかな…、などと考えながら、札幌インターにある白石清掃工場の明かりが見えた時にはホッとしたことが印象に残っている。

さまざまな学びが多く、貴重な体験をすることができた1年半だった。お世話になった方々には本当に感謝している。



57歳で道本部専従になって

長谷 陽子 (1952年生まれ/幕別町職)

2009年2月-10年9月自治労共済事務局次長

13年前の道本部専従のことで記憶が曖昧だ。私は、57才の時に専従になったが、出る前は何かと問題があった。「十勝から女性を」と言われ、当時十勝地本女性部長は上士幌町の佐藤さん、副委員長は幕別町の長谷だった。女性部の組強委員会で、専従に出られる人はいないの

か話し合いをしたが、名乗り出してくれる人はいなかった。私が44歳の時、道本の女性部長選出にあたり、その当時もいろいろあったが、新得町職の佐野幸子さんに決断をいただき十勝の面目がたって、感謝、感謝だった。

その13年後、また十勝に共済担当の女

性を出してほしいと要請がきた。専従になるには決心がいと同時に、まわりの人たちに説明し理解をしてもらうことが大変だった。専従になってからは年齢が高いと歓迎されなかった。しかし、道本部女性専従が初めて2割に増えたことは良かったと思う。共済の仕事は面白く、全道をまわられたことも勉強になったが、組合員に怒られたこともあった。

1年6カ月の専従で、共済事務局のみ

なさんには迷惑をかけたと思うが、毎年共済加入者を募集し、前年より増えた時はうれしかった。

また、全道を回っている時、上湧別と湧別が合併した次の年に、自治労を脱退をしたことが印象に残っている。私にとって組合は守ってくれる組織で、常に情報提供があり勉強する場所であると思っている。



自治労の底力感じた復興支援活動

伊藤 美恵子 (1961年生まれ/深川市職労)

2010年2月-12年3月組織部長

道本部専従を終えてから、すでに12年が経過し、当時の多忙だった日々も忘れてはいるが、今でも心に強く残っているのは、東日本大震災での「自治労復興支援活動」だ。

自治労本部は、震災発生の翌日に災害対策本部を立ち上げ、特に被害が大きかった岩手、宮城、福島 の3県に全国の仲間とともに支援活動に取り組んだ。

私も、第2グループで全道の仲間と15人で宮古市の避難所へ赴き、避難所の運営、支援物資の調達や仕分けなどの活動をした。

未曾有の大災害で支援活動も困難を極めたが、公共サービス労働者として日々、住民のみなさんの生活を支える業務に邁進している自治労組合員だからこそ、被災者のみなさんや現地の自治体職員に寄り添った活動ができるのだと、改めて自

治労の底力を痛感する貴重な体験であった。

組織部長としての2年間、たくさんの単組にオルグや集会でお邪魔したが、そんな中でよく若い組合員から「組合に加入しているメリットは何ですか?」と質問されることがあった。組合費を払っているけれど何もメリットを感じないというふうのことだった。私からの答えは「メリットを感じたければ、自分自身で組合の活動に参加してみる。メリットは誰かに教えてもらうものではなく、自分が行動してみて実感するもの」と、私自身の経験からお伝えしていた。今も昔も組合員一人ひとりの活動が、自分たちがめざす職場や社会を創っていくのだと信じている。

道本部結成60年を節目として、組合員がより一層団結を強め、限らない前進をされるよう心から願っている。



職場・地域に根ざした自治労運動を

難波 優 (1960年生まれ/富良野市労連)

2013年10月-17年9月副執行委員長

13年間の上川地方本部委員長のあと、52歳で道本部副委員長に就任し、総合政策局を担当したが、特に忘れられない印象的なことがある。

厳しい財政状況の中、地域医療を守ることは、市町村にとっても大きな課題の一つだ。2015年3月、「新公立病院ガイドライン」が総務省から出され、各自治体は新たに公立病院改革プランを策定し、病院機能見直しや経営改革を迫られた。

そんな中、町立松前病院が経営形態の変更に伴い病院長が辞職。さらなる常勤医の減少で、病院の存続自体が危惧された。急遽、道本部内に組織労働局と総合政策局による横断的な組織「公立病院対策委員会」を設置し、私が委員長となった。

16年11月19、20日に、道知事に対して、病院の医療機能充実と働きやすい環境を

求める署名行動を松前町で取り組んだ。当日は、松前町労連を中心に渡島地本各単組、さらに檜山地本や連合渡島地協の協力も得て、約150人の組合員が一斉に全戸訪問した。2日間で3166筆。最終的に住民の半数を超える4059筆を集めた。

この署名は、11月29日、道本部、渡島地本、松前町労連、松前病職労共同で北海道に提出し要請。さらに道議会全会派にも要請行動を行った。

私も、署名行動し、町民のみなさんから「病院がなくなったら本当に困る。頑張ってもらいたい」という切実な声もかけられ、地域医療の重要性を肌で感じた。また、この取り組みをとおして、自治労や連合の組織力も改めて痛感した。

今後も、自治労の組織力をフルに発揮し職場・地域に根ざした運動を期待する。



自治労運動は地方自治の根幹

和田 英浩 (1967年生まれ/砂川市労連)

2013年10月組織部長、15年10月-17年9月副執行委員長

私の砂川市職労執行委員長以降の略歴は、空知地本執行委員長(07年12月40歳~)道本部副執行委員長、自治労本部中央執行委員(~21年8月54歳)。

なぜ略歴を引き合いに出したかって? 私の労働組合での広域デビューは、夕張市の再建団体入りから(再生団体として

の再建は08年から)はじまった。その前の時代から空知地本管内は名だたる産炭地として、長く日本のエネルギー政策を支えてきた。しかし、国の政策転換で大きな経済的打撃を受け、日本で一番貧乏な自治体と揶揄された時期だった。

略歴のとおり、関わってきた自治労運

動は地方自治の根幹に触れる機会で、揺るぎない自分の柱だ。基礎自治体である市町村がどう地域住民に関わってきたか、苦しんできたか、そしてどうあるべきかの観点から多くを学んだ。

道本部では道庁対策、自治労本部では国会議員、総務省のキャリア官僚と直接議論する機会を得て、大きな財産となった。今は内閣官房で、当時はその担当だった北海道出身の総務官僚が、「当時を良く覚えているので、現地で学習会をする」

とまで言っていた。

一番の思い出は、夕張市役所財政破綻で大量の退職者が出た時だ。昨日まで係員だった仲間が、主任や係長の職種にかざるを得ず、右往左往して苦しむ姿を見て、少しでも助けたいと思った。地本役員で協力し、空知管内市町村で同じ職種の仲間、休日、夕張市役所で仕事のノウハウを伝えて助けてくれた。これぞ自治労運動だと感動した光景を忘れることはできない。



激動の衆院選と岸まきこの参院選

佐古岡 秀徳（1974年生まれ／京極町職）

2015年10月組織部長、16年10月政治部長、19年10月－20年3月臨時執行委員（政治担当）

道本部結成60周年のわずか4年6カ月だが、道本部運動の一翼を担えたことを、大変光栄に思う。また、道本部運動を通じて多くの仲間と出会えたことは、私にとって大きな財産になっている。

役員期間の大半が政治部であったことから、政治部での3年間を振り返る。まずは、2017年の衆議院選挙。今までに経験したことのない、短期間で政治情勢が急展開した激動の選挙だった。道本部定期大会前日、国会が解散されると同時に民進党の候補予定者全員が希望の党から出馬することに疑問を感じていたのも束の間、『排除』発言が飛び出し、憤りを感じたことが忘れられない。結果は「弱い者いじめの被害者」となった立憲民主党に追い風が吹いたが、この選挙での『踏

み絵』がきっかけで、後のリベラル勢力分断に繋がったと感じている。

次は、19年の参議院選挙。選挙の2年前に「岸まきこ」を候補予定者として決定したものの、選挙までの多くの期間は「まだ先の話でしょ」とか、「統一自治体選挙が終わるまでは無理」と言われつづけ、「岸まきこ」のイメージカラー同様、ブルーな日々を過ごしながらの選挙だった。その中で無事ゴールを迎えられたのは、後援会役員の峰崎直樹、高柳薫両顧問をはじめ、各単組・地方本部に支えられたからにはほかならず、皆さまには感謝の気持ちでいっぱいだ。

最後に、道本部役職員をはじめ、道本部に結集する仲間の今後のご活躍を心より応援している。ともにがんばろう。



課題残った「会計年度任用職員制度」

松本 敦子（1953生まれ／札幌市職連）

2016年4月－18年9月臨時執行委員（臨時非常勤等・組織拡大担当）

任務に就いた時、全国臨時・非常勤等職員協議会は、非常勤職員の任用根拠について法的に位置づけ、任期の定めのない職員とするため、国会の付帯決議をもとに総務省や厚労省への交渉を重ねていた。参議院での院内集会では、非常勤仲間の相原久美子参議に出席いただき、多くの議員に実態報告ができた。

さらに、道本部臨時・非常勤等職員連絡会議が中心となり、街頭行動や機関会議でニュースの配布や、発言で組織拡大の協力を求め続けた。

その後、国から私たちが求めている形ではない、会計年度内とする「会計年度任用職員制度」が出され、今の制度よりマイナスにならない取り組みの強化を確認した。

理解を求める難しさを感じた2年半だった。組織化された単組に接点は持てるが、未加入の当事者に会うには相当な

ハードルがあった。単組の執行部に協力を求めると、「自分も臨時職員から一般職員になった。組織化に努力する」との、心強い言葉が力になった。

また、制度の変更にむけて直接当局に声をあげようと、加入希望の声を聞いた時は、うれしさがこみあげた。制度の課題が多く残ったが、まったく手つかずの地方公務員法が60年かかり変更となったのだ。これをバネに、より良い制度となるよう、当事者が粘り強く声をあげて行かなくてはならない。

任期切れで、学習会の約束をしたが、行くことが叶わなかった単組には申し訳なく思っている。協力してくれた地本や単組執行部の方には本当に感謝したい。道本部には、今後も、任期の定めのない勤務職員となるよう求め続けてほしいと願う。



自信をもってたたかいを進めよう

真壁 英治（1956年生まれ／全道労労連）

2016年4月－20年9月臨時執行委員（自主福祉・衛生医療評担当）

病院・診療所等のいわゆる医療機関、保健所は常に政治の道具の一つとして扱われてきた。そこで働く労働者は厳しい

労働環境に置かれ、自分たちの力で自治体・病院当局と解決する手段もなかなか行使できないのが現状であった。

国の政策で、1994年地域保健法制定から公衆衛生を担う職員が減らされ、その結果、新型コロナウイルスへの対応は後手となった。

歴代の自民党首相が常に「骨太の方針」等による、公立病院・公的病院の統廃合や、診療報酬改正を標的とし、厚労省の「医療介護総合確保推進法」による地域医療連携構想、医師の働き方改革、労働基準法の改正など、枚挙にいとまがない。

それに対し、道本部は毅然として取り組みを進めた。特に地方独立行政法人法の取り組みは、自治労本部、道本部、全道庁本部が民主党と連携し、国会対策を進め付帯決議などを勝ち取り、全国の病院労組が取り組むための足がかりとなった。

その後も道本部は、看護師不足・医師確保対策など、連合北海道と連携し、署名活動を進め、単組の取り組み支援、病院財政や経営形態の学習会の開催。さらに、コロナ禍における病院職員への処遇改善など道本部と地方本部、単組、病院労組が一体となって取り組む姿勢ができつつある。

自らの労働条件は、議会対策や病院・自治体当局との交渉でしか改善されない。そのためにも経営形態や病院財政についてしっかり身につけ、当局の口車に乗ることなく組合員ための取り組みを進めることである。今は、その芽ができつつある。自ら自信をもってたたかいて進めよう。



安心、安全は自治労の役割で原点

樫野 久美子（1969年生まれ／平取町職労）

2016年10月組織部長、18年10月自治体政策部長、19年10月—20年3月臨時執行委員（道民運動担当）

運動史第3巻の発刊を機に、今後の運動を担う方々が、道本部が積み重ねてきた歴史を、現代の取り組みに昇華することを期待している。

休職専従の3年間は、さまざまな状況を理解し、加えて情報を集め、どう運動に落とし込むか、伝えるかに没頭し、頭と体をずいぶん使った日々だった。「ムチャぶり」もあったように思う。

スタートは組織部長だった。会計年度任用職員制度と非正規職員の組織化が大きなテーマで、自分の任期終了と法施行

が同じで、「この取り組みがあなたの命題」、と言われたこともあった。組織化はすでに取り組んでいた役員、専門員がおり、自分は制度をどう解釈できるか、とにかく学び伝えようと考えた。

その後、自治体政策部長と道民運動を担当した。自治労が関わる取り組みは幅広く、なかには身近に感じられない課題もあるかもしれない。しかし、どれも「安心、安全」に暮らし、働くための取り組みで、全国各地に存在する自治労という組織の役割があり、スケールメリットが

ある「原点」なのだ。

なかなか得ることのない知識を得て、見過ごししてしまいがちな課題に触れ、自治体職員ではない視点で物事を考える経

験もできた。全国の仲間とのご縁もいただいた。その間、組合員はじめ多くの皆さまに大変お世話になったことを、厚く、熱く、お礼申し上げたい。



労働組合は人生の学校

永田 重人（1964年生まれ／全道庁労連）

2017年10月－21年9月賃金労働部長

「労働組合は人生の学校」と、賃金担当者会議や学習会で単組役員に話したことを思い出す。多くの人と出会い、時には一緒に泣き、喜びを分かち合う。多くを学ぶ人生の学校だ。私も多くの経験を積むことができた。

2019年賃金確定闘争では、人事院勧告で借家居住者の住居手当の見直し(改悪)が出された。宿舍の設置状況や手当の支給実態等が国と地方では異なると、大衆交渉で追求、青年部員も交渉に参加し、切実な実態を訴え、単なる「人勧準拠」でなく、自治体独自の賃金決定となり、今後の糧となった。

賃金・労働条件の改善には、要求書を提出した上で、労使交渉が不可欠だ。労使関係ルールの確立と、日ごろの交渉・協議が必要なことも発信し続けた。

17春闘期から継続課題の「時間外勤務

手当単価への寒冷地手当等の算入」も、地方公務員は国家公務員とは異なり、労働基準法が適用されるため、寒冷地手当を時間外勤務手当の基礎となる給与に算入しなければ、労基法違反だと発信した。その結果、9割以上の自治体で算入を勝ち取ったのは、粘り強いたたかひの成果だと考えている。

コロナ禍で、賃金担当者会議を全道開催から地方本部単位に変更し、多くの単組役員が参加・意思統一ができたことも良かった。

感動は多くの出会いや努力から生まれる。「努力なくして奇跡なし」、「賃金・労働条件を学ぶ」ことは、組合員の「世話役活動」に役立つと、多くの学習会で発信し、単組役員が真摯にむき合ってくれたことに感謝したい。



ジェンダー深める信念の2年半

大浦 三奈（1970年生まれ／足寄町職労）

2018年12月－2020年9月女性部長（2017年9月女性部総会で選出）

女性部長になる3年前から、女性部長が非専従だったこともあり、当時の女性部の大きな課題は「女性部役員の専従配置」だった。その間、基本組織の役員の方もお借りしながら議論した。結果、私が女性部長となり、単組と十勝地方本部で協力体制をつくっていただき、道本部執行委員としては2年半専従し、そのバトンを大村女性部長に渡すことができた。

正直、女性部長として女性の意見を組織の中で反映させることができたか、という力が及ばなかったことも多々あった。それでも、女性部で実施している「職場改善実態調査」の結果を、春闘方針や意識調査につなげていただいた。また、コロナ禍で実施した「緊急実態調査」をさまざまな場面で取り上げていただき、

まわりの執行委員や担当書記の助けを得ながら、女性組合員の声を道本部運動に反映させることができた。

また、この2年半はジェンダーについて取り組んできた期間でもある。各地本の基本組織の役員との議論や、青年女性春闘討論集会で講演するなど、女性部以外でも話しをする機会をいただき、少しずつだが理解を深めることができた。ジェンダーの理解を深めることは、誰もが働きやすい職場づくりに繋がるという信念の2年半だった。

自治労北海道は形を変えながらもついで行く。今後も多くの女性が道本部運動に関わり、より良い職場づくりや、社会づくりに繋がっていくことを願っている。



原点は半径5メートルの女性組合員

大村 さやか（1985年生まれ／愛別町職）

2020年10月道本部女性部長・専従、2022年10月・非専従

あんなに組合が大嫌いだったのに、まさか専従する日が来るとは夢にも思っていなかった。女性部運動に関わりはじめてのも、「なんだかしっくりくるから」が理由だった。それでも専従を決意した原点は、半径5メートルの女性組合員の悩める姿がどうしても気になったから

だ。私に何ができるかわからなかったが、とにかくみんなと一緒に見たことのない景色を見たくて、初めてオンライン開催となった定期総会の場で女性部長に就任した。

コロナ禍の運動は、予想以上に良かった。会えないことがこんなにも大変

なことだとは思わなかった。それでも、道本部のみなさんに助けられ、オンラインという新たな手段を活用して、模索し続けた2年間だった。北海道はやっぱり広くて、自分の無知を痛感し、多くの学びがあった。みんなに気づいてほしいこと、みんなと一緒に考えたいこと、さまざまな課題に対して、色んなチャレンジをしてきた経験と、運動に共感してくれた仲間存在は私の大きな財産だ。

非専従となった今、少しずつ対面の機

会が増えるにつれて、「会える」ことがどれほど価値のあることか、そして、容易いことではないことを改めて実感している。「あたり前」が変化していくなかで、私も道本部運動の通過点になれるように、「今」を積み上げていかなければならないし、それは立場が変わったとしても続いていくことだと思う。道本部運動が私の思い出になるのは、もう少し先になりそうだ。